鈴の音

中さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴の音

【Ｎコード】

Ｎ１４１４Ｘ

【作者名】

中さん

【あらすじ】

霊力のある双子の春美（かずみ）と春恵（かずえ）が新たな地で悪霊退治！！親類どころか村中を巻き込む死闘が始まる。

喜びアリ哀しみアリの物語。

引っ越してきた双子

「よいしょっ、よいしょっ」
「大丈夫？春美ちゃん。」
「大丈夫だよ、春恵ちゃん。」
双子の姉妹は大きな荷物を持って、新しい家に向かっていた。
春恵「もぅっ、何でこんなに遠いの！？」
春美「もぅちょっとだから…」
橋を渡ったところで、同い年位の男の子が話しかけてきた。
「あんたらが春美と春恵？」
『？』
2人は首を傾けた。
すると男の子は2人の返事を聞かずに、2人の荷物を持って行った。
春恵「ちょっ！」
春美「春恵ちゃん、どうやら彼はお世話になる宇宙さんの家族の方の様よ。」
春恵「え！？」
春美「ついていきましょう。」
春恵「え〜！」

春美は嫌がる春恵を引きずって行った。

長い山の道を歩いて行くと、大きな歴史ありげな家が見えてきた。
春恵「すげぇー、デカっ！」
春美（ここ、見覚えがある…？）
「何してるんの？早く中に入れば？」
男の子はすぐに中に入って行った。

宇宙家

「いらっしゃい、よくきたねぇ。」
家の奥から2人の祖母、松子（まつこ）が出てきた。
『おばあちゃん！』
2人はこの家に来るのは初めてだが、松子とは小さい時からよく会っていた。
松子「2人とも疲れただろう？冷たいお茶を用意しているよ。」
春恵「やったぁー」
2人は家にあがった。

松子「2人の荷物は部屋に置かせたよ。部屋は、この廊下を真っ直ぐ行ったところの階段の前の部屋だよ。」
2人は松子にリビングに案内された。リビングは二階にあり、途中に部屋の場所も聞いた。

リビングに入るとそこには、さっきの男の子ともうひとり男の子と女の人がいた。
松子「2人の叔母の乙葉（おとは）と、もうひとりの叔母の紅葉（こうは）の子供達、涼介（りょうすけ）と光輝（こうき）だよ。」
乙葉「この子達が私の姪の春美ちゃんと春恵ちゃん？さっすが双子、そっくりね。」
『…。』
乙葉「私は乙葉、よろしくね。」
涼介「僕は涼介だよ。いとこ同士仲良くしようね。」
『は、はいっ。』
光輝「…。」
光輝は何も言わずにリビングから出ていった。

春恵「さっきの…。」
涼介「あの子が光輝。」
乙葉「こぅちゃんは、少し照れ屋なのよっ。」
涼介「あんまり気にしないでね。」
『うん…。』
2人はうなずいた。
松子「乙葉、紅葉や吉ちゃん達を知らないかい？」
乙葉「さぁ。買い物にでも行ってるんじゃなぁい？」
松子「そうかい…。じゃあ、紅葉達は昼食の時に紹介するとしようか。2人はそれまで部屋でゆっくりしているといいよ。」
『はい。』
2人が返事をすると、松子も部屋から出ていった。

ｰ昼食時
2人は涼介に案内されて、別館の二階のダイニングルームに行った。
そこには、乙葉と光輝以外に6人いたので、2人とも緊張した。
乙葉「奥から順に、2人の叔母兼私の姉の紅葉。次に母さん…おばあちゃんの妹の孫家族の道子（みちこ）さんと拓也（たくや）さんと、2人の子供の拓真（たくま）くんよ。」
春恵（ひ孫！？）
乙葉「こっちが、道子さんのいとこの吉長（よしなが）くんと加帆（かほ）ちゃんよ。」
春恵（ホントに大家族だよ！）
乙葉「おばあちゃんは、別で妹の梅子（うめこ）さんと梅子さんの夫の吉男（よしお）さんの3人で食べてるのよ。」
春美「すごい大家族ですね。」
乙葉「そうね。」
春美「ご迷惑をかけないように、頑張ります！春美と春恵ですっよろしくお願いします。」
春美はお辞儀をすると、続いて春恵もお辞儀をした。
加保「やだ、そんな固くならないで！！仲良くしましょ？」

加保の言葉に、２人の緊張はとけた。

祠（ほこら）

昼食中、加帆が積極的に話しかけてくれて、食卓はにぎわった。
加帆「あ、そうだ！
ごはん食べ終わったらみんなで、村の散歩に行こうよ！」
涼介「そうだね。この村には古い神社とか遺跡（？）みたいな建造物が多いから、楽しんでもらえると思うよ。」
春美「おもしろそぅ♪」
春恵「うん。」
加帆「決まりねっ！
各自準備したら、玄関に集合ね！」
『はいっ！』
2人は元気よく返事した。

昼食を終えてしばらくすると、乙葉・涼介・吉長・加帆・道子・拓真の6人と春美と春恵の2人が玄関に集まった。
加帆「じゃあ、出発！」
8人は元気よく家を出た。
まず8人は山道を登り、土地神を祀る神社に参拝した。
涼介「ここの神様は、この村が豊作に恵まれるように見守っているんだよ。」
春美「春恵ちゃん、お世話になる土地神様なんだから、ちゃんとあいさつしなくちゃね。」
春恵「だね。」
2人は手を合わせた。
涼介「…？」
その2人の姿に、涼介は何かを感じた。
参拝を終えると、つぎは山の中腹の祠（ほこら）に行った。

涼介「この村には、古い祠が４つ東西南北にあり、昔この山にいた悪霊を封じていると、伝わっている。」
加帆「そうじゃなくても、ここら辺は道がややこしいから、迷ったら大変なの。だから2人だけで祠には行かないでね。」
『…はい』
加帆「ここの祠は”北の首”（きたのしゅ）と言うのよ。”南の首”（みなみのしゅ）はあっちの方向にある大樹の根元にあるの。”東の首”（ひがしのしゅ）はむこうのバス停のとこに、そして”西の首”（にしのしゅ）はこっちの小学校の校庭にあるわ。」
春恵「そういえば、バス降りたら祠っぽいものあったね。」
春美「うん。」
加帆「それが東の首よ。」
『へぇ～。』
すると乙葉は話に飽きたのか、突然話に入ってきた。
乙葉「…祠の説明は終わるとして、みんな、暑くない？」
そう言って乙葉は8人を無理矢理村のはずれにある唯一のスーパーにつれて行った。

壊された封印

スーパーに行った8人は、乙葉のおごりでアイスを買って食べた。
乙葉「んーっ！！うまっ！！！」
春恵「うんうん！」
拓真「お母さん、もっともっと！」
まだ3歳の拓真は、母道子と2人で1つのアイスを食べていた。
道子「だめよ、お腹壊しちゃいますよ。」
拓真「もっともっと〜」
拓真のおねだりは続いた。
乙葉「たくちゃん欲しがってるんだから、もっとあげればいいのに…。」
道子「乙葉ってばぁ…。」
涼介「乙葉さん、拓真を甘やかしすぎると、またおばあちゃんに怒られますよ。」
乙葉「別にいいじゃない。おいしいんだから…。」
涼介は乙葉の甥っ子なのに、乙葉のお兄さんみたいだった。
春美「ねぇ、春恵ちゃん。さっきの祠だけど、どう思う？」
春美がこっそり聞いてきた。
春恵「どうって…？」
春美「悪霊を封印って…。」
春恵「ああ…。私は何か嫌な感じがした。」
春美「やっぱり？春恵ちゃんも思ったんだ。」
春恵「春美ちゃんも！？」
春美「何か…」
そこに涼介が話に入ってきた。
涼介「やっぱり2人は感じるんだね。」
『…？』

ドッ！

その時、一瞬大きな揺れが起こった。
ドドドドドドドドド…
まるで地面の底から込み上げてくるかのように、揺れが大きくなった。
『何！？』
スーパーの中は大きな揺れで、陳列だなが倒れてきたり、屋根がはがれ落ちてきたりして、めちゃくちゃになっていった。
道子「みんな、ここは危険よ！
ガラスに注意して外に！！」
道子の指示で、8人は外に出た。するとさっきまでいたところに屋根がはがれ落ちてきた。
加帆「間一髪…。」
春美「！？」
春美はひとり、山の方を見た。
春恵「春美ちゃん、どうしたの？」
春恵の言葉で、みんなは春美を見て山を見た。
『！？』
すると山の方の祠がある辺りから、天空に真っ直ぐと光が伸びていた。
加帆「みんな、あっちも…。」
加帆がみたのは、他の祠の方から天空に真っ直ぐと伸びる光だった。

ゾクッ

『！？』
その時、春美と春恵だけでなく、涼介・加帆・乙葉・吉長・道子も、背筋が凍りつくような何かを感じた。春美（これは…邪気！）
春恵「春美ちゃん？」
春恵は、黙っている春美を心配した。
加帆「あ…、おばあちゃん達がまだ家に！」

吉長「先に戻ってるぞ！」
吉長が一番に走りだし、誰よりも早くに家に戻っていった。
加帆「待って！」
加帆も吉長を追った。
道子「涼介くん、私たちも家に…」
涼介「うん、2人もついてきて！」
春恵「はいっ！」
道子は拓真を抱いて、走り出すと涼介と春恵も走り出した。
春美（春恵ちゃん！！）
春恵（？）
春美は春恵を心で呼び止めた。
春美（私達は、あっちへ行くわよ！）
春恵（うん…？）
春美と春恵は別の方向に走って行った。
涼介「！？」
それに涼介は気がつき、道子を先に行かせ、2人を追った。
春恵「どこに行くの！？」
春美「祠のとこっ！」
春恵「何でっ？」
春美「行けばわかるよっ！」
2人は山道も休まずに走った。
春恵（！）
春恵は止まった。
春美「？」
春美は振り返った。
春恵「春美ちゃん待って！」
春恵「何か聞こえない？」
春美「…。」
2人は耳を澄ませた。

ゴゴゴゴゴ…

涼介「2人ともこっちに来て！」
涼介が2人に追い付いた。
『涼介くん！？』
涼介「この音は土砂が崩れる音だ！」
『！？』
2人は涼介のいる場所に走った。
ドゴォー
移動した直後、土砂が木々と崩れて行った。
『…！？』
土砂の中に、さっきまでいた北の首の祠が流れていった。
涼介「祠が…。」
これは、祠の封印が解けたことを示していた。

”た……を…た…！”
祠が2人の目の前を崩れ落ちるとき、春美は声を聞いた。
春美「何…？」
春恵「春美ちゃん？」
”助け…ま…を助け…！”
春美「っ…！？」
声は大きくなり、春美は頭痛に襲われた。
春恵「春美ちゃん！！」
涼介「…。」
春美は立っていられなくなり、気を失った。
春恵「春美ちゃん、春美ちゃん！？」
春恵は春美の体を左右に揺さぶったが、春美は目を覚まさなかった。

ーひとつ、
伝説の雪女が甦るー
気絶した春美の頭にその言葉が響いた。

春美「ん…？」

春美は部屋で目を覚ました。
春恵「よかった…目が覚めて。」
春美「あれ…？部屋…か。」
春美の隣には、春恵がいた。
春恵「あの後、気絶した春美ちゃんを涼介くんが運んでくれたの。」
春美「……。」
春恵「みんなはダイニングに集まってるよ。」
春美「ああ…。」

春美は軽く返事をした。
春恵「…？」
春美（ーひとつ、伝説の雪女が甦るーって…何だったの？）
春美の頭の中は、その声の事で一杯だった。

春美と春恵は、とりあえずダイニングに行った。
春美「クシュッ…」
春美はくしゃみをした。
春恵「大丈夫？夏風邪？」
春美「何だか寒い気がする。」
春恵「…確かに。」
ダイニングに行くと、乙葉・涼介・光輝・松子・道子・拓也・拓真・吉長・加帆がいた。
春恵「あれ？梅子おばあちゃんと吉男おじいちゃんと紅葉叔母さんは…？」
乙葉「吉男さんがさっきの地震で腰をいわして、病院に行ったの。梅子おばあちゃんと紅葉叔母さんは、付き添いよ。」
乙葉は2人を見た。
涼介「何事もなければいいんだけどね…。」
春美「…そうですね。
あの…祠の封印って、どうなったんですか？」
涼介「壊されてしまったよ。」
春美「これから、大変な事になるでしょうね。」
春恵「春美ちゃん、何か感じる？」
春美「うん。村中から異様な気配を感じるわ。」
春恵「やっぱり…。」
涼介は2人を見た。
涼介「君たち2人は霊力の持ち主なんだね。」
『はい。』
乙葉は2人を見た。

乙葉「2人とも!?」
涼介「祠の封印をしたのは宇宙家だ。だから宇宙家にはよく霊力を
持つ者が生まれる。
僕や乙葉さん、吉長くんとか…。
代々宇宙家には、封印を守る当主がいて…。」
乙葉「それが涼介くんってわけ。」
『!?』
涼介「…あのね、封印の話はまだ続きがあるんだ。
封印したのは悪霊だけじゃないんだ。」
突然涼介の雰囲気が変わった。
涼介「悪霊の他に、雪女・鬼・河童・天狗も封印してるんだ。
それぞれが村で悪さをしてたのを、先代が封印したんだ。」
春恵「そんなモノが…。」
春美「そんな…。」
その時だった。
吉長「みんな大変だ!!外を見ろ!!」
吉長が窓の外を見て叫んだ。

始まり

全員は吉長の叫びで外を見た。
外は一面雪景色になっていた。
春恵「今は真夏なのに…。」
加帆「どうして雪が降ってるの！？」

ーゾクッ

春美は寒気がした。
春美「ーひとつ、伝説の雪女が甦るー」
春美はあの言葉を口にした。
涼介「春美ちゃん、今の…何？」
春美「夢に出てきた言葉です。」
涼介「…。」
春恵「あ、女の人がいる！」
春恵は川の方を指差した。
加帆「何？
…誰もいないじゃん。」
春恵「いるよ！」
加帆「何も見えないわよ。」
春恵「え…？」
「あれは雪女。だから霊力のない者には見えないのよ。」
『！？』
突然部屋の中心から声がしたので、春美と春恵と涼介と乙葉と吉長は、振り返った。その声は、春美が夢で聞いたものだった。
そこには幼い女の子がいた。
「もちろん、霊力のない者には私も見えてないの。」
春美「あなたは誰？」

「私は桜子。みんなにお願いがあって来たの。」
春美「お願い？」
すると加帆が春美に気づいた。
加帆「えっ…何と話してるの！？」
春美「ここに女の子が…。」
加帆「やめてよ、気持ち悪いっ！！
何なのよ…女の子？雪？
これも霊力があるから？嫌っ！！」
吉長「落ち着け、加帆。」
吉長は加帆をなだめた。
桜子「まずひとつ、あなたの力を貸して…？」
桜子は手を出した。
春美「私の…？いいわよ。」
春美は桜子の小さな手に、自分の手を重ねた。

ーフワッ

春美の手から桜子の手を通して、霊力が流れた。
桜子「ん…んーっ…っあ！！」
桜子の体は春美の力で満たされた。
加帆「えっ…！？」
光輝「女の子が…現れた？」
松子「…。」
春美の霊力があり、霊力のない者にも女の子が見えるようになった。
松子「あ…。」
桜子は松子を見た。
桜子「久しぶり、松子。」
松子「さ、桜子…。」
すると、涼介が思い出した。
涼介「思い出した！？

桜子…宇宙桜子といえば、宇宙家最強の霊能力者。
そして、松子おばあちゃんの妹。」
『えっ！！』
2人は驚いた。
桜子「そんなに驚かないで。生きていれば、あなたたちと同じ、霊力の持ち主なんだから。」
桜子は笑った。
松子「何で桜子が今に…。」
桜子「私はね、今までずっと伝えたかったの。
でも、私を存在させるほどの力を持った者はなかなか現れなかった。
でも、今日は春美ちゃんのおかげでみんなに姿を見てもらうことができたわ。ありがとう。」
春美「い、いえ…。」
涼介「伝えたかった事って？」
桜子はみんなを見た。
桜子「みんな、早くこの村から出ていきなさい。これからは、この村が地獄とかすから。」
春恵「どーゆー事？」
桜子「封印よ。４つのうち1つの封印が解けた。あと3つの封印が解かれるのも時間の問題なの。
だから、完全に封印が解かれる前に、みんなにはこの村から出ていって欲しい。」
涼介「そんな…封印が解かれるなんて…。」
桜子「封印がされてから早200年。いくら封印した者がすごい霊力者であっても、人間に代わりない。限界位すぐ来る。
全ての封印が解かれてからじゃ遅いのよっ！！」
桜子は叫んだ。
涼介「…わかった、この村に残った人間を外にだそう。」
春恵「外って…？」
その時だった。

ーフッ…

雪女がこの家にいる霊力者に気付き、中に現れた。

雪女

雪女「人間…見つけた。」
春美「雪、女…。」
部屋内の空気が凍えた。
加帆「えっ、今度は何!?」
松子「一体…?」
霊力のない者には、その姿は見えなかったが、何かそこにいるのはわかった。
桜子は霊力のない者たちを守るように、前に立った。

ーピト…

雪女は涼介の手を触った。
涼介「冷たっ!!」
雪女「…温かい。」
春美「あなたは誰?雪女さんだよね?」
雪女「そう、私は雪女。200年ぶりに起きちゃった。」
春美「私は春美。ねぇ…今は夏だから、まだ出てきちゃだめよ。」
雪女「やだよ。私、人間の言うことなんて聞かないんだからっ!!」
春美「えっ…どうして?」
雪女「私、人間嫌いだもんっ。」
春恵「は?」
春恵は少し強ばった言い方をした。
雪女「…。」
雪女は春恵をにらんだ。
春美「春恵ちゃんっ!」
春美は春恵の袖を引っ張り、黙らせた。
春美「…どうして人間が嫌いなの?」

雪女「人間は勝手過ぎるっ
私たち雪女や雪男たちは、山で静かに雪を降らせて暮らしてただけなのに、人間は何もしてない私たちを"ただ存在が怖い"というだけで封印した。
その際に、お母さんやお父さんやお姉ちゃん、お兄ちゃん…他の仲間たちは、みんな人間に抵抗して殺された。」
『…そんな。』
雪女「封印されてから200年、山を、自然を破壊してるのは人間じゃないか！
私にとっちゃ、人間の方が怖いね。」

涼介「…。」
涼介は初めて知った雪女の怨みを聞いて、何も言えなかった。
春美「…だから、
仕返しするの？人間に…。」
雪女「そうよ！みんなの仇を私が討ってやるんだからっ！！」
春恵「な…。」
雪女「人間は全員凍え殺す！」
雪女の冷たく青く氷のような瞳が雪女の恐ろしさを醸し出していた。
雪女「…でも。」
すると、雪女の瞳は優しくなり、春美を見た。
雪女「ーでも、春美だけは助けてやってもいい。」
春美「…なぜ？」
雪女「あなたは特別だからね。」
春美「…？みんなは助けてくれないの？」
春美は聞いた。
雪女「助けないに決まってるでしょ！助けて何の得があるの？」
春美（私には得がある…？）
雪女「それ以前に、雪女が人間を助ける事なんてない。」
春恵「でも春美ちゃんだけは助けるんだ~。」

雪女「まぁね。」
雪女は勝ち誇ったように、腰に手を当てた。
春恵「言ってる意味わかんないし！！」
すると雪女は、みんなから身を引いた。
雪女「お前たち、よく聞け！！
こんな村、私が１日でぶっ潰す！覚悟しな！！」
そう言うと、雪女は吹雪と共に消えた。

脱出

乙葉「何、今の…。」
春恵「まるで、今から戦いが始まるみたい。」
春美「みたいじゃない。始まるのよ。」
加帆「えっ何！？何が起こったの？」
松子「説明しておくれ。」
拓也「さっぱりわからん。」
霊力のある者は戸惑い、霊力のない者は状況がわからず慌てた。
道子「一体何があったの？」
すると、春美は頭の整理ができたのか、何もわからない人たちに、状況を説明した。
春美「今さっき、雪女から宣戦布告を言い渡された。村を潰すーと…。」
加帆「え！！」
道子「…。」
拓也「何！？」
松子「本当にかい？」
桜子「うん。」
松子「…。」
全員は、当主である涼介の判断を待った。
涼介「…、さっきに言ったように、この村に残った人たちを外へ逃がそう！！
春恵「外へ…。」
涼介「でも、誰かがここに残らなければならない。」
『何で？』
涼介「まず、誰かが村を見渡せる所に残り、敵の雪女の動きを見張らなければならない。」
春美「そうね、雪女が襲ってくるかもしれない…。」

涼介「そういうこと。
次に、今邪気が村から出ないように張られている結界に穴をあけて、その穴を維持する者が残らなければならない。」
春恵「2人…。」
乙葉「じゃあ、どちらも霊力が必要なわけね。」
すると、春美は手を挙げた。
春美「私が残るわ！」春恵「春美ちゃん…、なら私も。」
涼介「だめだ！！宇宙家以外の人間を巻き込むわけにはいかない。」
春美「何を心配してるの？
もう十分巻き込まれてる。」
涼介「でも、危険だ！」
春美「大丈夫です。私、そんなに弱くない。」
涼介「でも…。」
すると乙葉が入ってきた。
乙葉「私が春美ちゃんの代わりに残るわ！」
涼介「乙葉さん！？」
乙葉「私が見張りをやる。
涼介は結界を維持して。
吉長くんはみんなの移動を！」
春美「でもっ！」
乙葉「涼介が言うように、宇宙家以外の人間を巻き込むわけにはいかない。2人はみんなと一緒に村を出て！」
春美「…わかりました。」
春恵（春美ちゃん？）
あの諦めの悪い春美がすぐに承諾したのを、春恵は不思議に思った。
涼介「よしっ、そうと決まれば早速行動に移そう！」
乙葉「ええ。」
桜子「私も手伝うわ！」
涼介「ありがとう、助かります。」
こうして、宇宙家の脱出計画は幕を開けた。

まず、涼介と吉長が村に残ってる人たちを秘かに公民館に集めた。
そして、乙葉が予定地である屋上へ上がると、計画を実行に移した。
涼介「よしっ、行きましょう！」
涼介の合図で６０人ちかくの村人は、静かに移動を始めた。
乙葉｛こちら乙葉。雪女、現在山の学校裏に潜伏中。｝
吉長｛了解！｝
見張りの乙葉とは、無線で連絡を取り合った。
春恵は目を輝かせた。
春恵「無線とか、かっこいい！」
春美「もぅ、春恵ちゃんてば…。」
春美は苦笑いした。
村人たちは、涼介と吉長を先頭に、結界の一番遠いところにむかっていた。
その途中だった。
加帆「…っ何これ！？」
「「キャー！！！！！」」
村の大樹の側を通った時、村人たちは、雪女に無惨にも殺された村の仲間たちの骸を見たのだった。
体は八つ裂きに斬られ、首がとんでる者もいた。
気がつけば、そこら辺りは一面、積もっていた真っ白い雪が赤く染まっていた。
女に限らず男も叫ぶほどだった。
春美「ヤバいっ！みんな、走って！！」
涼介「え！？」
春美「雪女が来る！」
すると乙葉からも連絡があった。
乙葉｛　大変よ！雪女がさっきの悲鳴を聞いて、そっちに行ったわ。急いで！！｝
それを聞いた涼介は大きな声で村人に命令した。

涼介「走れー！！！！」
涼介と吉長だけでなく、春美と春恵も　みんなを走らせた。
みんなは一斉に全力疾走で橋を渡り、スーパーの側を通り、バス停のところで止まった。
涼介「はぁっ！！」
涼介は全力で結界に穴を開けた。
吉長「早く出て！」
吉長は春美・春恵と共に、村人を外に出した。
涼介「くっ…。」
途中、穴が小さくなった。
春恵「え！？」
春美「涼介くんが限界なのよ！」
春恵「そんな…村人はまだ沢山いるのに！」
開けれる穴がそんなにでかくないので、いっきに通れるのは2人だけだった。
だから、後ろには行列ができていた。
桜子「雪女が来たぞ！！」
振り向ける者だけが振り返った。
雪女「逃さない！」

ヒュ〜

雪女が吹雪を発生させ、霰が村人を襲った。
春美「だめー！」
春美は持っている霊力で、独自に結界を作った。

カキーン、キーン…

結界は霰を跳ね返し、吹雪から村人を守った。
雪女「何っ！？」

春美「させないっ！」
春美も意地になった。
涼介「くぁっ…」
穴はどんどん小さくなっていった。
春恵「手伝うわ！」
春恵は霊力を手に集め、小さくなる結界の端をもち、広げていった。
涼介「春恵ちゃん！？」
春恵「いいから黙って集中！」
涼介「…うん。」
穴は元の大きさに戻った。

そして、残ったのは涼介・春美・春恵・吉長・乙葉・光輝だけになった。
吉長「次は春美ちゃんと春恵ちゃんが…。」
春恵「だめっ、今手を離したら…穴が…っ。」
春美「私も…雪女を止めてないとっ」
涼介「次は光輝と吉長が出て！」
春美ちゃんと春恵ちゃんは次に…。」
光輝「…でもっ！」
その時だった。
雪女「もぅ怒った！！！」
雪女が本気を出してきた。
春美「キャ！」
雪女の吹雪が激しくなり、春美の結界を突き破った。
そして、春恵にむかった。
春美「春恵ちゃん！！」
涼介「危ない！」
涼介は結界から手を離して、春恵を押し倒した。

ーザン

2人のいたところに大きな氷柱が刺さっていた。
春恵「っ…！」
春美「春恵ちゃん、涼介くん！」
春美は2人に駆け寄った。
涼介「…。」
2人は無事だったが、春美に怒りが立ち込めた。
春美「私の妹を傷つける奴は、誰であろうと許さない！！」
春美は近づいてきていた雪女の腕を握った。
雪女「なっ！」
春美「消えて…っ。消えろ！！」
春美の怒りは力へと変わり、雪女の手を浄化した。
雪女「イヤーッ！！」
春美「消えろー！！」
雪女「ギャー！！！」
雪女の手の皮膚が剥がれ、肉が朽ち、骨が溶けていった。
そしてそれは体全体に広がった。
雪女「っ…こんなことで終わらせない！！めちゃくちゃにしてやるっ！！」
雪女は最後の力で呪いをかけた。
春美「！？」
気がついたら、雪女は氷に変わっていた。その氷はあっという間に溶けて消えていった。

つかの間の休息

春美「っ…、ハァハァハァハァ。」
涼介「フーフー…。」
春恵「っ…。」
3人とも、結界に穴を作れるほど力は残ってなかった。
光輝「涼介！」
光輝は涼介に駆け寄った。
涼介「バカヤロウ！！何で残ったんだ！」
光輝「ほっとけないだろう！」
吉長「まあまあ…。」
結局、涼介・乙葉以外に春美と春恵・光輝・吉長も残ってしまった。
吉長「とにかく、今現在に結界に穴を開けれるほどの霊力を持っている人はいないんだ。
一度家にもどって休もう。」
涼介「だが…。」
春美「吉長くんの意見に賛成するわ。雪女は滅したけど、村に積もった雪が溶けるには当分かかりそうよ。
霊力の回復を待つには、あまりに寒すぎると思うの。」
春恵「うん、思う。」
すると涼介は立っているのが限界なのか、ふらついた。
そして、家に戻ることにしぶしぶ賛成したのだった。

家に戻ると、乙葉ももどっていて、吉長や光輝はともかく、春美と春恵がいることに驚いた。
乙葉「なぁんだ、結局残っちゃったのね。」
春美「仕方ない状況だっから…。」
乙葉「ま、いいわ。とりあえず、霊力を回復しなくちゃね。夕食を作るから、待ってて。」

そう言うと、乙葉は台所へと行った。
光輝「俺は、乙葉を手伝ってくる。」
光輝も台所へと行った。
涼介「僕は部屋で休むよ。
2人も吉長くんも、休んでね。」
春美「はい、わかりました。」
吉長「何時に起きるとか言ってってくれると、起こしにいくぜ?」
吉長はたまに兄のような雰囲気を出す。
涼介「ありがとう。でも今はいいや…。」
涼介は軽く断り、自分の部屋に行った。
吉長「そうか。ゆっくり休め。」
吉長は涼介の頭をポンッとなでた。

ードクン

春美「!?」
また春美の頭に声が響いた。
ーふたつ、
散った怨念が集うー
春美「っ…!。」
春美に頭の痛みが襲った。
春恵「春美ちゃん!!」
春美「だ、大丈夫。」
春恵　「…とりあえず、春美ちゃんも部屋で休んで?」
春美「や、私は…。」
すると、春恵は今までよりきつく言った。
春恵「ダメ!寝てな!!」
春美「…わかったよ。」
春美は怒られた子供のように、シュンとして部屋へ行った。
心配な春恵は後ろからついていった。

吉長「ほんと、仲間良しだぁなぁ」
吉長は笑った。

春美は部屋に入ると、疲れがいっきにでてきたのか、春恵のことも忘れて眠ってしまった。

夢の中で、桜子が出てきた。
桜子「ひとまずお疲れ様。
松子を逃がしてくれてありがとう。」
春美「いえ。
桜子さんこそ…、雪女を浄化した時に、力を貸してくれましたよね？」
桜子「気づいてたの？」
春美「はい。私はあの時、本気を出さないように、ギリギリの力で対応してたので、浄化したときは驚きました。」
桜子「…そうでしょうね。」
桜子は目を細めた。
桜子「涼介の回復には、2日は必要よ。それまでは、あなたの体も休めなさい。
春美「わかっています。それより、ひとつだけ聞きたいことがあるんです。」
桜子「私の答えれる範囲なら。」
春美「さっき雪女は何か力を使ったみたいなんです。何に使ったかわかりますか？」
桜子「ああ。」

ードン！

夢の外から大きな音がした。
春美「何…？」

桜子「雪女の仕掛けたものだ。」
春美「何が起ころうとしてるの？」

ースゥ…

すると、桜子の身体は薄くなってきた。
春美「桜子！？」
桜子「…ふたつめの祠、南の首が壊された。封印されていた者が、また甦る。」
春美「え！？」
桜子「気をつけて…。」
桜子は消えてしまった。

そして、春美は夢から覚めた。

その幽霊、茨（いばら）

夢から覚めた春美がまず感じたのが、雪女よりも強烈な邪気だった。
春美「…あ、南の首が壊されたから。」
春美は急いでリビングに行った。
リビングに行くと、霊力が比較的弱い乙葉・春恵・吉長は、しゃがみこんでいた。
そして、霊力が全くない光輝は気絶していた。
涼介は無事な様で、光輝をソファーに寝かせた。
春美「涼介くん…、これは？」
涼介「さっき南の首が壊されて出てきた邪気が、みんなにはきついんだろう。
僕も、立っているのが精一杯なんだ。春美ちゃんはどう？」
春美「私は…。」

ースゥ…

その時春美の中に、何かが入ってきた。
春美「っ…。」
涼介「…？
どうしたの、春美ちゃん？」
春美「私は…茨。」
涼介「!？」
春美の様子がおかしかった。
涼介「…春美ちゃん？」
春美「私は、茨よ。」
涼介「……憑依（ひょうい）か。」
春美「そうよ。
私の声を代弁できる人を探してたら、この子が一番しっくりきたか

ら。体、借りちゃった♪」
春美の中に入った子が笑うと、春美も笑った。
涼介「…何が目的なのかな、茨。」
春美「ふふっ、お願いよ。
私の願いを叶えて欲しいの。」
涼介「願い？」
春美はうなづいた。
春美「川辺の近くにある小学校。」
涼介「桜ヶ丘小学校！？」
春美「そう。そこに、あなたとこの子の2人が来ることが、お願いよ。」
涼介「…そこに行って、どうしろと？」
春美「行けばわかる。」
涼介「…何？」
春美「じゃあ、頼むわね！」
春美は目を閉じた。

ースゥ…

春美から茨が抜けた。
涼介「…茨？」
春美「…え？茨？？」
涼介「春美ちゃん！」
春美「何？」
元の春美に戻っていた。
春美「今…私…何が？」
涼介は、今あった事を春美に説明した。
春美「…じゃあ、その茨ちゃんは桜ヶ丘小学校に来てって言ったのね。」

涼介「うん」
春美「で、涼介くんはどうするの？　」
涼介「ん～…。」
春美「私は行く！」
涼介「…危険かもしれないんだよ？」
春美「封印に関係あるかもしれないし…気になる。」
涼介「…。」
涼介は考えた。そして…
涼介「わかった。僕も行こう！」
春美「…ありがと。」
涼介は行く事を決めた。

小さな鈴

春美と涼介の2人は、倒れている春恵・光輝・吉長・乙葉を家に残して、桜ヶ丘小学校に向かった。

小学校の前に行くと、中から異様な数の邪気が溢れ出ていた。
涼介「っ…。」
さすがに涼介も苦しさを感じてきたようだ。
春美「涼介くん…。」
しかし春美は特に影響を受けていないようだった。
春美「…涼介くんは、ここにいて。中には私だけが入るわ！」
涼介「なっ…！？」
春美「強い邪気で、立ってるのが精一杯なんでしょ？」
涼介「だが…！」
春美「いいから、ここに残って！！私は1人で大丈夫だから。」
春美は涼介を軽く押した。
すると涼介は立っているのがままならく、バランスがとりにくくなっていた。
涼介「う…わかったよ。」
涼介は、承諾した。
春美「ん。じゃ。」
春美は小学校の中に入った。

中に入ってすぐの玄関ホールには、　人を襲うこともできない弱い霊が集まっていた。
彼らはただ春美が奥に進んで行くのを見ているだけだった。
ガサゴソ…
春美は首から下げていたお守りの中から、小さな鈴を取り出した。
春美（今日もお世話になります。）春美はこれまでの霊を成仏する

とき、　いつもではないが、その鈴に頼っていた。

リィン…

美しい鈴の音がする。

春美は鈴を大事に持って奥へと進んだ。

開戦

学校の廊下の窓は、段ボールがガムテープでベタベタに張られていて、光が遮られて薄暗くなっていた。
教室の窓も同じようになっていた。
春美は、邪気を一番強く感じるところへ向かった。
そこは、多目的室とかかれてあった。
春美「ここ…。」

ーガラガラ…

春美はドアを開けた。
すると、中には沢山の幽霊が集まり、音楽をながしてパーティーの様なことをしていた。
春美「！」
春美は、パーティーに夢中な幽霊たちをすり抜け、奥で集まる邪気の元へ行った。
「おや、生きている人間じゃないですか…。」
春美は奥の幽霊に気づかれた。
奥の幽霊が話すと、みなダンスや食べることを止めて、春美を見た
「ここが、どういう場所かわかっているのか？」
春美「わかっていますよ。」
春美は答えた。
「わかっているのなら、ここに来るべきでなかったな。
来てしまったら、我々はあなたを排除するしかない。」
春美「勘違いしてない？
排除するのは私！
されるのはあなたたちよ！！」
「なんと、これまた気の強い女がきたもんだ。」

「そんな事、できると思っているのか？」
腕に自信のある幽霊が前に出た。
春美「できるわよ！」
春美は顔を上げたまま腰を低めた。
「簡単にはさせませんよ。」
１人の幽霊がまた一歩出て、炎を操り春美に攻撃を先にしかけた。

ーボォウ！

春美「おもしろい。」
炎は春美の周りを回り、春美の死角を狙った。
春美「おっと…。」
春美はクルッと体を回転してよけた。
「逃げても無駄だ！！」

ーボォウッ！ボォウッ！

複数の炎が春美の足元に現れ、春美の両足をつかんだ。
春美「熱っ！！」
春美はその場で足を上げたり跳ねたりしたが、炎は消えなかった。
春美「ったく…」
春美は霊力を体から放出した。

ーホワァッ！

その霊力は炎を消し去った。
「ほぉう…なかなかの霊力。」
春美に休憩の時間外は与えられず、すぐに次の攻撃がきた。

ーゴォォォォ！！

炎の威力が強くなった。
「さぁ、次は消すことができるかな？」
炎を操る幽霊は笑った。

激戦

春美の目の前に、大きな炎の塊が現れた。
春美「消し去るッ！」
春美は霊力を高めた。
そして、動こうとした時。

ーギュッ！

春美「っぁ！？」
春美は動いた瞬間に首に細いロープ状の様なものが巻かれたので、
自分の勢いで自分を苦しめる結果になった。

ーギュ…

ロープを使う幽霊は、春美の首を締め付けた。
春美「っ…」
春美は抵抗した。
「終わりだ。」
春美「！」
春美は手に霊力を集め、指先の一点に集中した。

ーブィィィン

霊力は実体化し、細長い刃が現れた。
刃は粒子サイズが細かく振動しているので、ロープを切り裂くことができた。
春美「ゲホッ…ゲホッ…
ゴホッ…ゴホッ…」

春美は地面に転がり落ちた。

ーシュッ！

息を整える春美の頭のすぐ近くにの地面に、ナイフが突き刺さった。
春美「！？」
春美は上を見ると、数本のナイフが春美にむかって落ちてきていた。
春美はすぐに寝返りをうち、その勢いで、立ち上がった。

ーシュッ、シュッ、シュッ、

ナイフは春美が転がっていたところに突き刺さった。
「よく、よけれましたね。」
春美「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ…。」
「でも、もうよけれませんよ。」
その幽霊はナイフをどこからか出し、両手に持った。
そして、器用に回し始めた。
春美「っ…。」
春美はナイフだけでなく、全ての幽霊に注意しながら動いた。
春美が幽霊に近づくと、幽霊はナイフを刺そうとしてきた。

ーシュッ！シュッ！

春美は大きな動きはせず、必要最小限によけた。
「ちょこまかと…」

ーすぅっ

春美「！？」
ナイフの反対側からロープが飛んできた。

それを春美は左によけた。
すると、よけた方向には炎を持って待ち構えていた幽霊がいた。
春美（誘導された！？
この幽霊たち、知恵がきく…）
春美「ハアァァァ！！」
春美は高めた霊力を放出した。

ーボォ、ボォォォォ！！

しかし、一瞬炎が弱まっただけで炎は燃え続けた。
春美「消せない！？…イヤァァァ！！」
炎は春美を燃やした。

激戦（2）

炎に包まれた春美の体は、既に熱さを感じることもできなかった。
汗すら出ず、皮膚は焼け焦げ、血が蒸発していった。
春美「っ…」
もう、話す力さえなかった。
春美（私…ここで、死ぬの?。
…い、嫌だ…。死にたく…ない。）
そう思った時だった。

ーガタン！

部屋のドアが開いた。
涼介「春美ちゃん！」
涼介が、春美の霊力の異変に気づき、中に入ってきていた。
春美（り…涼介…くん?）
涼介は、春美を助けようと、幽霊に立ち向かった。
涼介「よくもっ！！
宇宙家秘伝、滅殺術！」
涼介は、中指を下唇につけて、小さな声で素早く術を唱えた。

「何！?うわぁ～！！！」
1人の幽霊が悲鳴をあげて、白い煙を上らせながら、消えた。
涼介の術が効いているようだ。
「こいつも霊能力者か！?」
「やっちまえ！」
幽霊たちは涼介を囲んだ。
春美「りょ…すけ…くん！」
春美は手を伸ばした。

「お前は今すぐ死ね！」
炎を操る幽霊は、炎の威力を上げてきた。
春美（た、助け…ないと！）
春美は鈴を取り出した。

ーリィン…

涼介（鈴の音？）
春美（鈴よ…、私の願いを…叶えて！
私と涼介くんを…助けて！！）

ーリィン！

すると春美の周りに強力な結界が現れて、炎から春美を守った。
そして、涼介には霊力の補充が与えられた。
涼介「！？」
涼介は霊力が急に戻ったので、驚いた。
春美は結界で身を守られるだけでなく、炎で焼け焦げた体中の皮膚を癒された。
春美「っ…涼介くん！」

ーパァン！！

春美は涼介を囲む幽霊を消し去った。
春美「鈴よ、私に力を！！」

ーチリーン…リーン…リー…ン

鈴が、幽霊たちの頭の中で響いた。
「「う…うわぁ〜！」」

幽霊たちは頭を抑えて、嘆き苦しんだ。
「グアアァァ！！
頭が割れるように痛い！！」
「痛い痛い痛い！！」

ーリーン…チリーン…リーン

鈴が鳴り止むことはなかった。
春美「消え去れ！！」
春美の一言で、幽霊たちが一斉に消え散っていった。
灰一つ残らなかった。

涼介「…春美ちゃん。」
広い教室に、二人だけが立っていた。
春美「村中の邪気が消えた…。
これで、みんな目を覚ますね。」
春美は涼介の元に近寄った。
春美「大丈夫？涼介くん。」
涼介「僕は…、それより春美ちゃんは？」
春美「大丈夫よ。」
涼介「…でも、霊力が減って。」
春美「私は鈴から霊力の供給があるから、使いすぎて死ぬことはないの。」
涼介「…そう。」
春美「さぁ、家に帰ろ…？」
涼介「うん…。」
涼介は、うなづいた。

茨の願い

2人が家に戻ると、春恵・吉長・乙葉・光輝の4人は目覚めていた。
春美「春恵ちゃん！」
春恵「春美ちゃん！」
春美と春恵は無事を喜んだ。
乙葉「何か、村中に広がってた気持ち悪いものがなくなってる。」
乙葉「2人がやってくれたの？」
乙葉は、春美と涼介を見た。
涼介「まぁ、ほとんど春美ちゃんが…ですけど。」
乙葉「すごい…すごいわ！」
すると、春恵は春美をもう一度見た。
春恵「もしかして、あの鈴に力を？」
春美「うん。」
春恵「…そぅ。」
春恵はつぶやいた。

ｰスゥッ…

春美「!?」
春美の中に、また何かが入った。

ｰフラ…

春美は気を失い、春恵にもたれ掛かった。
春恵「春美ちゃん？…春美ちゃん！春美ちゃん！」
春恵は春美を揺すったが、春美は目を覚まさなかった。
涼介「春美ちゃん！」
乙葉「春美ちゃんをソファーに…。」

乙葉の指示で、春恵は春美をソファーに寝かした。
そして医師免許を意外にも持っていた乙葉が、春美を診察した。

乙葉「…………。
大丈夫よ。脈は通常、呼吸もしてる。あえて言うなら、前より霊力が弱まっている。
だから、これは霊力の休息なのかもしれないわ。」
涼介「休んでいれば、いいんですね？」
乙葉「そうよ。」
春恵「よ、よかった…。」

ーグゥ…キュルルル〜

安心すると、春恵のお腹が鳴った。
春恵「うぉっ！」
春恵はお腹を抑えた。
乙葉「ふふ、遅くなったけど、夕食にしましょうね。」
乙葉はキッチンに、冷めた料理を温め直しに行った。
もう、朝だった。

その頃、春美は春美の中に入った幽霊、茨と2人だけで話していた。
春美「あなたが茨ちゃんね。
初めまして、春美です。」
茨「初めまして。
村を救ってくれてありがとう。」
春美「いいえ。」
茨「…あなたになら、この先も村を任せることができそうね。」
茨は小さな声でつぶやいた。
春美「…？」
茨は春美の手を握った。

茨「私はこの村で生まれて、この村で死んだ。
ここでの記憶は１０年とわずかだったけど、この村は、私の大切な場所なの！」
春美「…。」
茨「だから…だから、これからもこの村を守って！！」
茨の強い願いだ。
春美「…うん。守るよ…私もこの村が好きだからね。」
春美は微笑んだ。
茨「ありがと…。」
すると、茨の体は透けていった。
茨の未練は断たれ、成仏していったのだ。
春美「…約束は必ず守る！
まずは、封印をし直さなくちゃ。」
春美は祠の封印を決意した。

封印の方法

茨が成仏していった後に、桜子が現れた。
春美「…桜子。」
桜子「さすが、春美ちゃんね。
坦々と封印してたモノを消していくんだもん。ひょっとしたら、宇宙家最強なんじゃない？
私も最強だと言われてきたのに、春美ちゃんは私以上でビックリしたわ。そろそろ、〝最強〟も襲名時期なのかもね。」
桜子は笑った。
春美「気楽ね。私は死にかけたのに…。」
春美は少し怒っている様だった。
桜子「でも助かったわ。鈴のお陰でねっ！」
春美「何で…鈴のこと、知ってるの？」
桜子「…覚えていないの？」
春美「何のこと？」
春美は頭を傾けた。
桜子「…そぅ、覚えてないのね。」
桜子はつぶやいた。
春美は聞き取れなかった。
春美「？」
春美が聞き返しても、桜子は答えなかった。
春美「…まぁ、いいわ。」
春美は口をとがらせた。
だが何かを思いつき、桜子を見た。
春美「ねぇ桜子、聞きたいことがあるんだけど…。」
桜子「何を？」
春美「宇宙家最強と言われた桜子なら、祠の封印の仕方、わかるでしょ？私に教えて欲しい。」

桜子「…祠の封印をし直す気？」
春美「うん。これからも封印が壊れていけば、封印されていた者全てを滅しなければならなくなるでしょ？……できれば、私は人間じゃなくても、その命を奪うことはしたくないの。」
桜子「ふぅ〜ん、いいわよ。」
桜子は案外簡単に返事を出した。
桜子「あ、でも…。私は封印の力を使ったことがないの。だから、覚えてる方法が曖昧なんだ。
封印の方法は、家の倉の中にあるから、自分の目で見て覚えて？」
春美「はい。」
桜子「確か、巻物だったはずよ。
……封印、頑張ってね。」
桜子は手を振って消えていった。

春美は目が覚めると、すぐに倉を探した。
そして、中庭に大きな倉を見つけた。
春美「でか…。」
春美は倉を見上げながら、扉についている古い錠に触ろうとした。
光輝「何してんの？」
その時、たまたま渡り廊下を通っていた光輝が春美に気づき、近づいた。
春美「…えっと…。」
光輝「中の物に興味あんの？
でも、無駄だ。その錠は、鍵穴が錆びてて鍵が入らないんだ。
もぅ40年も開いてないらしいぜ。」
春美「…そうなんだ。」
春美は倉を見た。
春美「ねぇ、開けれないって事は、もし中に入れたらみんなの不便が1つなくなるのよね？」
光輝「…だろうな。中には高い値打ちの掘り出し物がけっこーある

って言って……て、もしかして開けれるのか？」
春美「うん。みんなには何の問題もないよね？」
光輝「あ、ああ…。」
すると、春美は両手で錠を握り、霊力を籠めた。

ーガチャ…

錠は鈍い音を出し、引き抜くことができた。
光輝「スゲェ…。」
春美「こーゆーのは、少し力入れるだけでいいんだって。」
光輝「へぇ〜、誰か言ったのか？」
春美「昔にね…。
ん、あれ？誰から聞いたっけ？？」
春美は思い出せなかった。

ーギイイィィ

春美は重い扉を押し開けた。

宇宙葉嗣（そらノはつぐ）

春美と光輝の2人は倉の中にゆっくりと入った。
そして春美は巻物を探しに奥に進んだ。
また光輝の方は中の色んな物に興味をひかれ、扉近くの物を、物色した。
春美は奥に行くと、巻物がなん本もある棚を見つけた。
春美「こんなに…。」
春美はすぐ手の届くところにあった巻物を手にして、中を見た。

ースルル…

春美「これは家系図だわっ！？
代は、おばあちゃんたちで止まってる。」
春美は家系図に、赤で囲まれている名前を見つけた。
春美「宇宙葉嗣（そらのはつぐ）？」
光輝「葉嗣は、封印をした先代らしいよ。」
光輝が横から顔を出した。
春美「この人が…。」
光輝「宇宙家最強と言われた桜子と同等の力を持っていたらしいよ。」
春美「…そんな強い人が封印したのに、解けてしまってるのね。」
光輝「ああ…。」
そう言って、光輝は別の場所を物色しだした。
春美は巻物を戻し、別の巻物を手に取ったが、量が多く全てに目を通す気になれなかった。
なので春美は巻物のタイトルを1つずつ見ていった。

”薬草のすすめ””妖怪図鑑””妖怪の滅し方””霊力の操作”等々の巻物があった。
春美「ん？」
春美は”霊力の操作”の巻物を見た。
そこには、力を籠めて鍵を開ける方法が書かれていた。
春美「あ、さっき使った方法だ。」
春美はその続きも見た。
そこには、霊力の奪い方や与え方が書かれていた。
春美「これで桜子は私から力を吸いとったんだ…ん？霊力の籠め方？」
春美は続きを見た。
春美「物に霊力を籠めることが可能…。ふぅん、こんなのもできるんだ。」
春美は巻物をもどした。

ーコト…

巻物の棚とは違う場所から物音がした。
春美「？」
音がした方に行くと、”秘伝書”と書かれた紙が貼ってある木箱を見つけた。
春美「秘伝書？」
春美はその木箱を、箱の置いてある棚から持ち出した。
春美はふたを開け、中の巻物を見た。
”封印方法”と、書かれていた。
春美「これだわ!？」
春美は巻物を広げた。
そこには、封印するための順序が書かれていた。
”其の一‥封印する器を用意するべし”
春美「器…。祠ね。」

”其の二：持ち合わせている霊力を全て注ぎ籠めるべし”
春美「これは…鈴があれば、なんとか。」
”其の三：封印する妖怪を瀕死に追い込み、器の側に置くべし”
春美「あ…雪女とかは消し去ったから、封印できない。
でも…封印し直すから、現在進行系でされてるのは大丈夫よね？」
春美は独り言を言っていた。
”其の四：封印する妖怪の妖力を注ぎ籠む霊力と練り合わせながら、器に入れるべし”
春美「妖力を霊力と練り込む…？」
春美はいまいちよく分かってなかった。
”器の外側から内側に渦を描くように練り込むべし”
春美「外から…？あ、そうか。」
春美は理解した。
光輝「目当ての物は見つかったか？」
光輝が気分良く春美のところにやって来た。
春美「…うん。光輝くんは何を見つけたの？」
すると、光輝は腕を出した。
腕には、七色に光るブレスレットを着けていた。
光輝「綺麗だろ？」
春美「うん。」
2人は倉の外に出た。

春美は空を見上げた。
春美「…また、邪気が強まってる。」
光輝「ふぅん。」
邪気を感じない光輝は、どうでもよさそうだった。
春美「祠の封印が解けかかってる！？早く封印をし直さなくちゃ！」
光輝「封印をし直す…？」
春美「うん。行ってくる！」
光輝「今すぐか？もぅ夕方だぞ！！」

春美「解ける前に行かなきゃ！！」
春美は走り出した。
光輝「春美！？」
光輝は追いかけた。

再封印！

春美は光輝と2人で桜ヶ丘小学校の祠、西の首に行った。
すると西の首の祠は、ひびが入り、そのひびから忌々しい邪気がでていた。
光輝「何だ…？気持ち悪っ！」
光輝は、眉をひそめた。
春美（霊力がなくても感じるの？
まだ封印は解けてないのに。
…封印されてるモノがすごい邪気を持っている？）
春美は祠の前にしゃがんだ。
そして、スイッチを切り替えた。
春美「今から祠の封印をし直すよ！」
春美はありったけの霊力を、祠からでている邪気と練り合わせ、祠の外側から渦を描くように中心に押し込んだ。

ーグググググググ…

すると、祠から封印を阻止しようとする邪気が、怪しい音を発しながら外に出てきた。
春美（何！？この強い邪気…。
こんなの私だけで抑えられるわけないっ！！）
春美の額に汗が流れた。
光輝「春美？」
春美「……ごめん、ちょっと黙ってて。集中しないと、中の奴に負けそうだから…。」
春美は口を閉じ、真っ直ぐに祠を見た。
光輝「おぅっ！」
光輝は春美の奮闘する後ろ姿をしっかりと見守った。

ーグググググググググググググググググググ…

しかし、祠からでている邪気はどんどん大きくなっていった。
春美「…くっ！！」
春美は邪気に押し出されそうになったので、地面に膝をつき、踏ん張った。

ーズリ…

だが、祠から押し出そうとする力に春美の踏ん張りは歯が立たず、春美の体は、地面にその跡を残して祠から遠くに下げられていった。
光輝「春美っ！！」
光輝は春美の背後にまわり、背中を押した。
春美「!？… 光輝くん？」
春美は驚いて、後を振り向きそうになった。
光輝「振り向くな！！体は俺が支えるから、お前は前だけを見て集中しろ！！」
春美「…うんっ！」
春美にとって、光輝は心強い存在になった。

ーグググググググ…

春美の力は強くなっていった。

「こざかしい…」

春美・光輝「!？」
祠から低く野太い声が聞こえた。
光輝「…今の声って？」

春美「封印されてる奴よ！！」
すると、祠から大きな手がゆっくりと出てきた。
春美「封印が…破られていってる！」
手が出てくると、一層に邪気も増した。
光輝「く…苦し…。」
光輝の力は弱まった。
春美「光輝くん！？」
光輝（くそっ…俺は何の役にもたてないのか！？…誰かの役にたちてぇ！！）

ーキラッ

すると、光輝の願いに反応したかのように、光輝の着けていた七色に光るブレスレットが、輝きだした。
春美（そのブレスレット、もしかして霊力が籠められたものなんじゃ…。）
春美は、さっき倉で見た巻物に思いあたるとこがあったので、思い出した。

「このっ、生意気な…。」

ブレスレットの輝きは、光輝の体を守るだけじゃなく、春美にも力を与えた。
春美「力が…みなぎってくるよ！」
光輝「ああ。」
春美「これならいける！
できるよ、封印！！」
そう思った時だった。

「できると思うなっ！！

小娘共っ！！！」

祠から今までにない、ものすごい邪気が放出された。
そして、祠から手だけでなく、腕までも出てきた。
春美「あ、キャアァァッ！！！」
光輝「うぁっ！？」
そね膨大な邪気に、２人は追いやられ、校庭の隅にあった祠から遠く離れた校舎まで飛ばされた。

ーピキッ…パキ、ボキ…

祠のひびが広がった。
そして、祠から大きな頭が出てきた。
頭には、２本のいかつい角があり、真っ赤な長い髪が祠から出た瞬間に、風になびいた。
光輝「…鬼！？」
そぅ、出てきたのは巨大な鬼だった。

ーバキーッ！！

鬼が祠から完全に出ると、祠は崩壊していった。
春美はがく然とした。
春美「…封印、しきれなかった。」
春美の声は、絶望を示していた。

初めてのケンカ

春美と光輝は、鬼が完全に復活する前に、その場を逃れた。
２人は家に戻った。

涼介「おかえり。」
涼介が腕を組んで２人を迎えた。
春美「涼介くん…。」
春美は封印のことを説明しようとした。
涼介「部屋で春恵ちゃんが横になってるから、行ってあげて？」
春美「うん。」
春美は部屋に行った。
春美が行くと、涼介は光輝を見た。
涼介「お前とは話がある。説明してもらおうか。」
光輝「ああ…。」
光輝は涼介に連れられて行った。

鬼が出てきたことで、霊力の弱い乙葉・春恵・吉長たちは邪気に負けて自分たちの部屋で、横になっていた。

春美は春恵のいる、２人の部屋に入った。
春美「春恵ちゃん！」
春美は横になっている春恵の側に駆け寄った。
春恵「…春美ちゃん。どこに行ってたの？
みんなで探したけど、見つからないから…心配した。」
春美「心配かけてごめん。
それと、ごめん…。」
春恵「何が？」

春美「西の首の封印、できなかった。」
春恵は窓の外を見た。
春恵「じゃあ、この強い邪気は封印されてた妖怪の…。」
春美「うん、鬼が出てきた。」
すると、春恵は起き上がった。
春恵「そんな危険な場所に…1人で行ってたの？」
春美「ううん、光輝くんがついてきてくれた。」
春恵「違う。霊力があったのは春美ちゃんだけ…？」
春美「あ、うん。そうだね。」
春恵「…。」
すると、春恵は黙りこんだ。
春美「春恵ちゃん？」
春恵「…そんな危険な場所に行くなら、せめて霊力のある人と…。」
春恵の声はだんだん小さくなった。
春美「何？」
春恵「私にも…一応、弱いけど、何の役にもたたないかもしれないけど、霊力がある。」
春恵のいつもと違う様子に、春美は戸惑った。
春美「何？どうしたの、春恵ちゃん。」
春恵「私、春美ちゃんのお姉ちゃんだよ？…生まれてきたのはほんのちょっとの差だけど。」
春美「何が言いたいの？」
春恵はその言葉に、込み上げていた想いが爆発した。
春恵「…だからっ私は、もっと頼ってほしいのっ！」
春美「は？」
春恵「いつもいつもいつも、」
春恵はその勢いで普段我慢してることを言った。
春美ちゃんは自分勝手すぎる！
強い霊力があるからって、…独りで何でもできると思わないで！！」
春美「そんな、思ってなんか…」

春恵「…思ってるから、独りで行っちゃうんでしょ？
雪女のときも、悪霊のときも！」
春美「だって、あれもそれも私にしかできないことだから…」
春恵「ほら、自分勝手！
雪女のときは、私も吉長くんもいたじゃん。みんなで力を合わせれば、春美ちゃん1人に負担かけなくていいじゃん。」
春美「でも…」
春恵「悪霊のときは涼介くんがいた。だけど、春美ちゃんは自分から突き放して、独りで行ったんでしょ？」
春美「そんなつもり…」
春恵の勢いは止まらなかった。
すると、今度は春美が怒った。
春恵「今回も、みんなで行けばよかったのよ！」
春美「違うっ！！私はみんなを守ろうと思ったから…」
春恵「私だって思ってる！！
だけど、みんなも思ってる！！
守られたいなんて思ってないっ！！」
春美と春恵の声は、どんどん大きくなった。
春美「そんなことわかってる！」
春恵「わかってないよ！！」
春恵はとうとう叫んだ。
そして、1度落ち着こうと深呼吸した。
春恵「…春美ちゃんがそこまで石頭だと思ってなかった。」
春美「私だって…」
春恵「春美ちゃんの馬鹿！
もう知らないっ！！」
そう言うと、春恵は立ち上がって部屋から出ていった。
春美「…春恵ちゃんの馬鹿！」
春美は床を蹴った。

記憶

封印で疲れきった春美は、春恵が部屋に戻ってくるのを待っていたが、いつのまにか眠ってしまった。

春美は、夢を見ていた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜　「お母さん」
声が聞こえた。
春美（ん…、ここは？）
春美の目の前には、大きく立派な宇宙家の門があった。
春美（あれ？私、部屋にいたのに。）
「お母さん」
不思議に思っていると、後ろから小さな女の子を連れた母が、歩いてこちらにやって来ていた。
春美（あ、お母さんっ
………………！？）
春美は両手を口に当てた。
声が出せないのだ！
「ねぇ、お母さん。ここがおとまりするおうち？」
母「ええ。」
母と小さな女の子は、まるで親子のような会話をしていた。
しかし春美には、この光景は微かに見覚えがあった。
春美（…。）
春美は周りの景色をじっくりと見渡した。
空は夜のはずだが、太陽が出て明るい。
周りの木々も、緑が目立ち、うるさくセミが鳴いてるはずだが、葉は落ち、代わりに白い物が積もっていた。
春美（…。）

最後に、春美は小さな女の子を見た。
「お母さんっ」
女の子は母と手をつなぎ、母が振り向くと、幸せそうに笑った。
春美（この子…私だ。）
それに気づいた時、家の中から今よりも若い乙葉が出てきた。
乙葉「長旅お疲れ♪
和葉、春美ちゃん。」
乙葉は確かに、女の子に”春美”と言ったのだ。

…そぅ、これは8年前
春美に霊力が目覚めて約1年が経った頃だ。
母は手に持っていた、少し膨らんだ手提げを乙葉にわたした。
和葉「じゃあ、よろしくね。」
そう言うと、母は小さな春美の目の高さまでしゃがんだ。
和葉「いい子にしてるのよ？」
「うんっ」
頭を撫でられ、春美は上機嫌だった。
和葉「じゃあ。」
乙葉「気をつけてね。」
和葉は春美を残し、待たせてあったタクシーに乗った。
「いってらっしゃい」
小さな手を大きく振ると、母もタクシーの中から手を振り替えした。
春美（私、一度ここに来てた。）
小さな春美と乙葉が家の中に入っていくので、春美もついていった。

「乙葉さん、誰ですか？この子。」
廊下を歩いてると、小さな男の子が話しかけてきた。
乙葉「春美ちゃんよ。
3日間、ここにお泊まりするのよ。仲良くしてあげてね。」
「はい。」

小さな男の子は、春美に手を差し出した。
「僕は涼介。」
「春美…。」
「あっちにおもちゃがあるから、あっちで遊ぼ！」
「うんっ」
小さな涼介は、小さな春美をリビングに連れて行った。
春美（あれが、涼介くん。
私と昔会ってた…。何でこんなこと、忘れてたんだろう？）

ーチラ…

春美（!?）
リビングに連れていかれる一瞬、小さな春美と春美は目があった。
だが、小さな春美はすぐに前を向いて何事もなかった様に、涼介と
行った。
春美（びっくりしたぁ…。
でも、確かに目が……）

ーパッ！！

その瞬間、周りの景色が一変した。
春美は、どこかの山の中にいた。

記憶（2）

春美（ここはどこ？）
春美は慌てて周りを見渡したが、見たことのない場所だった。
「ここは裏山です。」
春美（！？）
どこからか声が聞こえた。
声の方には、小さな春美がいた。
春美（私が見えてるの？）
「はい、ずっと…」
春美は声が出せないのに、小さな春美には言いたい事が伝わっていた。
「春美ちゃん？こっちに来て！」
小さな涼介の声だ。
「はいっ」
小さな春美が涼介の方に行ったので、春美もついていった。

その先には、見たことのない祠があった。
春美（あれ？知らない祠だ。）
祠は木々の奥の目立たない草影にひっそりとたたずんでいた。
「ここには宇宙葉嗣が最も苦戦した妖怪が2つ封印されてるんだって。」
小さな涼介は、舌足らずな口調で難しい言葉をしゃべった。
「そらのはつぐ？」
小さな春美にはわからない単語だった。
「うん、宇宙葉嗣。
ここの祠は”中の首”って言って、他の祠よりトクベツなんだって。」
「ふぅん。」

春美には、説明されてない祠だった。
春美（…〝中の首〟の祠の話なんて、聞いてない。
宇宙葉嗣が最も苦戦した妖怪？
一体何が封印されてるんだろう。）
春美が興味津々だったのを、小さな春美は気づいていた。
「見てみる？」
小さな春美は祠に触ろうと、手を伸ばした。

春美（!？）
その時春美には何かを感じたが、小さな涼介と春美は気づいてない様だった。
春美（…ダメ、触っちゃダメ！！）
「え？」
春美の想いは、小さな春美にちゃんと届いていたが、遅かった。

ーピト…

小さな春美の手は、祠に触れていた。

ーシュル…

祠から邪気が少し出た。
「あ～？」
邪気は、小さな春美の体に巻き付いた。

ーシューン！！

「キャー！！」
「春美ちゃんっ！」
邪気は、小さな春美を祠に吸い込んだ。そして、春美を助けようと

した小さな涼介も、祠に吸い込まれてしまった。

記憶（3）

小さな春美と涼介が祠に吸い込まれた後、また光景が変わった。

今度は、四方八方が真っ暗で、何も見えなかった。
春美（…何が起こったの？）
春美は理解できていなかった。
春美（…き、気持ち悪い。）
春美は手で口をふさいだ。
周りの邪気は、春美にも不快感をいだかせるほどの強さで、吸い込むと人体に被害がでるレベルだった。
春美（…これも記憶の続き？
8年前にこんなこと、あったっけ？）
こんな暗闇の記憶は、春美にはなかった。

ーソワッ…

春美（…？）
暗闇の奥から、微弱な霊力が流れてきた。
春美はその方向に向かった。

だんだんと、霊力が強く感じてくると、春美には子供の泣き声が聞こえてきた。
春美（私…それとも涼介くん？）
春美はうずくまっている子供の姿が見えた。
それは、小さい春美だった。
春美（大丈夫？）
春美は駆け寄った。
「う…うわぁんっ！こ、こわいよぉう～！！」

小さな春美の側には、涼介が倒れていた。
涼介も気絶する位の邪気なのだ。
春美（大丈夫よ、泣かないで。）
春美は小さな春美を元気つけようと、頭をなでようとした。が。

ースゥ！？

春美の手は、小さな春美には届かなかった。いや、触れることができなかった。
春美（！？
私は干渉してはいけないの…？）
春美は小さな春美を見た。
そして、優しい声で話しかけた。
春美（泣かないで、怖くないわ。
一緒にここからでましょ？）
小さな春美は鼻をすすって、うなづいた。

そして小さな春美が涼介を引きずって、その空間を移動しまわった。
しかし、出口は見つからなかった。

「…無駄だ。お前たちは完全に捕らえた。逃がさない。」

闇の中を低くこもった声が響いた。
「誰！？」
小さな春美はビクッと肩を縮めた。春美はそれに気付き、小さな春美の前に立った。
春美（私が、この子たちを守らなくちゃ…）

ーいつもいつもいつも、
春美ちゃんは自分勝手すぎる！

強い霊力があるからって、…独りで何でもできると思わないで！！

春美（！？）

春美の中に、春恵の言葉がよみがえった。

「キャー！！」

春美（！？）

小さな春美の悲鳴で、春美は我に返った。

春美（どうしたの？）

すると、小さな春美は震えた手で、ある方を差した。

春美（！？）

その方を見ると、大きな黄色い目が２つ、じっとこちらを見ていた。

「〜お前、喰らいがいのある霊力だなぁ…。」

目はギロッと小さな春美を見た。

春美（させないっ！）

春美は霊力を籠めようとしたが、霊力は集まらなかった。

春美（…力が発動しない？

そんなっ、今必要なのに！）

暗闇から出てきた、鬼以上の大きな手が春美を通り抜けて、小さな春美を握りつぶそうとした。

「イヤ！！」

ーチリィン…

その時、小さな春美の前にいきなり鈴が現れた。

春美（！？）

鈴は、霊力で結界を作り、大きな手が小さな春美に触れるのを防いだ。

記憶（4）

「こ、この霊力…宇宙葉嗣か！？」
闇の中からは、驚きの声が聞こえた。
春美（！？）
そして”宇宙葉嗣”という単語に、春美も驚いた。
「当たりです。」
鈴から霊魂らしき塊が出てきて、実体化した。
それは、白い召し物を身に纏った男だった。

「な、何故貴様が…」

葉嗣「この子は、私の子孫の中でも最も強く輝ける期待の星、こんなところで死なすわけにはいくまいて。」
春美（あれが、宇宙葉嗣？）
宇宙葉嗣の横顔は凛々しく、どこか涼介の面影があった。

「何故貴様、生きている？
封印から既に200年の月日は経ったはず！
いくら貴様でも、人間。死んでいるはずだが…。」

葉嗣「僕は君の言う通り、死んでいるよ。」
宇宙葉嗣は笑みを浮かべた。
「では何故…。」
大きな目は、葉嗣をじっくり観察した。

「…ふむ。大体理解したぞ、その鈴だな！！」

大きな手は鈴を指差した。
葉嗣「これはまた正解。
この鈴は、生前に、僕の霊力を籠めたものだからね。僕の魂が入るのは当然だろう？」

「ふふ…ははは！！
また会えるとは、嬉しいぞ！葉嗣よ。」

声は笑いだした。

「お前への怨み、当人にぶつけることができるとは……胸が高まる！」

葉嗣「私、怨まれるような事、しましたか？」
すると声は一変し、怒った。

「たわけがっ！！
２００年前貴様は、代々続く我大天狗一族を滅ぼし、わしを封じた！」

葉嗣「それは、そちらが人里で暴れたからで…。
悪い事とは、思わないなぁ。
ましてや、怨まれるなんて…。」

「何だと！?」

「…。」

ーギュッ！

その時、小さな春美は小さな手で、葉嗣の袖の端にしがみついた。
葉嗣「…大丈夫、春美。
私がついてるからな。」
葉嗣は、小さな春美を撫でた。
春美（あ…私、覚えてる。
誰かに頭を…）
春美は自分の頭を触った。

「今こそ貴様と貴様の一族を皆殺ししてくれる！！
我大天狗一族のようにな。」

ーゾクッ

声が終わると共に、膨大な邪気に包まれた。
葉嗣「殺させはしない！」

ーサラ〜…

葉嗣からは、心地よい霊力があふれでた。
そしてそれは、闇の中の大天狗を縛りつけ、さっきの祠に出る出口を造り出した。
葉嗣「さぁ、先に出なさい。」
「うん。」
小さな春美は、涼介を引きずりながら、葉嗣が造った出口を通っていった。
その時、大天狗のかすれた声が聞こえた。

「待て、逃げる気か！？
……覚えておけ！！
必ずしや、宇宙葉嗣と宇宙一族を滅ぼしてやる！！！」

怨みのこもった言葉だった。

小さな春美と涼介、葉嗣、そして春美の順に外へ出ると、葉嗣は祠の穴をふさいだ。

そして作業を終えると、小さな春美を見て、その高さまでしゃがんだ。
葉嗣「怖かったな。でも、泣かなかったのは偉いな！」
「…お姉ちゃんがいたし、あなたもいたから。」
葉嗣「〝お姉ちゃん〟？」
葉嗣には、春美の姿は見えていなかった様だ。
葉嗣「……それより春美。
私のお願いを聞いてくれるかな？」
「うん。」
小さな春美はうなづいた。
葉嗣「あと何年かしたら、私の封印は破られてしまう。
だから、その時は春美…君が代わりに新たな封印を施して欲しい。」
「ふうぃん？」
葉嗣「ああ。封印しないと、さっきの天狗が出てきてしまうんだ。
いや、天狗だけじゃない。
中の首には、天狗以外にも厄介なモノを封じている。
封印が解けてしまったら、大変な事になるからね…。」
そう言うと、葉嗣は小さな春美に、鈴を渡した。

ーリィン…

葉嗣「これは、お守りだよ。
大事に持っていてくれ…」
「わかった！」

ース…

葉嗣の体はだんだん透けていった。
葉嗣「ありがと……」
葉嗣は、最後まで言葉を述べる事なく消えていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
春美は夢から覚めた。
春美「…私、どうしてこんな大事なことを忘れてしまっていたの？
約束を、守らなくちゃ！」
春美は起き上がった。

ードクン…

春美「!?」
ーみっつ、
鬼の再来ー
春美の頭に、この声が響いた。

連れ去られた春恵

窓から外を見ると、もぅ真っ暗だった。月さえ出ていない。
春美が眠ってる間に、時刻は０時を回っていた。
起き上がった春美は、みんなが集まるリビングに行った。

涼介「あ、春美ちゃん。
夕方の事は光輝から聞いたよ。」
リビングに入ると、まず最初に涼介が話しかけてきた。
涼介「…でもね、そんな危険な事はもうしないでほしい。」
春美「…。」
涼介「もっと、僕らを頼って？
みんな、心配したんだから。
……約束だよ？」
春美「…はい。」
涼介は春恵と同じ事を言ったのがわかった。

リビングの奥には、春恵がいた。一度春美を見たが、すぐに目をそらした。
春美（やっぱり、目も合わせてくれない…。）
春恵が頑固なのは、春美が一番よく知っている事だ。
また、春美も頑固なのを春恵はよく知っている。
お互いに意地を張って、謝ろうとしなかった。

そこへ、乙葉があわてて来た。
乙葉「大変よ！！小学校の方を見て！」
全員は、窓から外を見た。

「「!?」」

全員が見たもの…それは暗くてよくは見えなかったが、小学校の屋上に陣取る鬼の姿だった。
春美「あれは、さっきの…。」
光輝「ああ、さっきの鬼だ！」
乙葉「！？」
すると、乙葉は気づいた。
乙葉「何でこぅちゃんにも鬼が見えるの？」
吉長「本当だ！」
光輝は返答に困っていた。
光輝「えっと…」
春美「…ブレスレット。
その霊力の籠っている七色のブレスレットのお陰じゃないのかな？」
光輝「ああ…そっか。」
光輝は袖をまくって見せた。
涼介「これは…どこで？」
光輝「倉だよ。鍵は春美が開けた。」
乙葉「あの鍵を開けることができたの！？」
春美「はい。」
すると、春恵は話の環から出た。
春恵（また一人で…。）
春恵は怒っていた。

その後、話はすぐに鬼に戻った。
涼介「どうする？春美ちゃん。」
春美「どうって…もちろん、退治するに決まってるよ！
放っておいたら、村が全壊しちゃう…。」
涼介「だね。」涼介は微笑んだ。
涼介「じゃあ、鬼退治には僕と春美ちゃんは絶対行くとして…。」
涼介は乙葉・光輝・吉長・春恵を見た。

吉長「大丈夫だ。行ける！」
乙葉「私も！…春恵ちゃんもだよね？」
春恵「う…うん。」
「俺も…」と光輝は言おうとしたが、涼介が即却下した。
涼介「だめだ！！光輝は残れ！」
光輝「まだ何も言ってねぇよ！
つか、俺も行く！！何か役にたてるかもしんねぇぞ！！」
涼介「鬼が見えるだけで、役にたつとでも思っているのか？」
涼介は腕を組んだ。
光輝「わかんねぇじゃん！！」
涼介「いいから、光輝は家にいろ！わかったな？」
光輝「う…。」
光輝は逆らえなかった。

結局、鬼退治に行くのは、涼介・春美・春恵・吉長・乙葉に決まり、光輝は留守番になった。

涼介「じゃあ、作戦を言う！」
みんなはテーブルの周りに集まった。
涼介「まず、僕と吉長くんと春恵ちゃんのチームが鬼に真っ正面からぶつかりに行く！
その隙に、春美ちゃんと乙葉さんのチームが鬼の背後に回り込んで、前後から鬼に攻撃を入れる！そして鬼が弱ってきたら、春美ちゃんが鬼を封印する。…どうかな？」
春美「いいわよ。」
乙葉「私も。」
吉長「ああ。」
春恵「…。」
ただ、春恵だけは返事をしなかった。
だが作戦は決まり、すぐに出発することになった。

そして光輝を除く、涼介・春美・春恵・吉長・乙葉は家を出た。
ただ、1人納得のいかない春恵は渋々、みんなの後をついて行った。

ードッ!!

春恵「っあ!?」
その時、春恵は誰かに殴られ気絶した。
みんなからは、少し距離をおいて歩いていたので、春恵が殴られた事には誰も気づかなかった。

ーズルズル…

そして春恵は誰かに引きずられ、どこかに連れていかれた。

乙葉「あら、春恵ちゃんがいない…。」
最初に気づいたのは、乙葉だった。
涼介「本当だ…。」
４人は振り返った。
春美「まったく、勝手な行動して…。」
（春恵ちゃん、どこにいるの？）
春美は春恵に心で話しかけたが、返事はなかった。
春美「ま、いいわ。行きましょ！」
（構ってる余裕なんてないよ…。）
乙葉「そうね。」
そして、再び４人は歩き出した。

小学校が近くなると、邪気が強く感じた。
春美「涼介くん、作戦だけど…。
春恵ちゃんがいなくて、そっちは大丈夫ですか？」
涼介「問題ないよ。」
春美「そ、よかった…。」
小学校の前で、ふたてに別れた。

春美は、自分と乙葉の霊力が鬼に気づかれないように、小規模な結界を張った。
そして、小学校の壁沿いに体を擦るようにくっつけて歩いた。

その頃、
家に留守中の光輝は、ただならぬ不安が込み上げていた。
光輝「やっぱ、俺も！」
光輝は歩き回っていたリビングをあとにして、家を走り出た。

そんな事を知らない涼介は、吉長と最後の確認をしていた。
涼介「…大丈夫ですか？」
吉長「ああ！」
涼介「危険だと感じたら、すぐに結界を張って身を守るんだよ！」
吉長「わかっているさ！」
涼介「ーよし！！」
２人は堂々と正門を通って、運動場の真ん中に立った。
すると、上から鬼が降りてきた。

ードスン！！

鬼が降りると、砂煙がたった。
涼介「…！」
（でかいな…。）
２人は見上げた。

「何だ…さっきの小娘共じゃないのか。」

涼介「春美ちゃんと光輝の事か！？」

「名前など知らん。だが、戦いがいのある奴等だ。お前らで代わりになるのか？」

吉長「ばかにするなー！！」
吉長は武器の竹刀を構えて、鬼に討ちかかった。
竹刀には、霊力が籠められており、微粒子が細かく振動している。
少しでも触れると怪我を負う代物だ。

ーザン！

吉長は、鬼の足元で竹刀を振るった。

「ああ？」

鬼は切られた右足を見た。
傷は、かすり傷程度だった。

「そんな物で…。なめられたものだ。」

鬼は片手で吉長を押し潰そうとした。
涼介「させるか！！」
涼介は走り出した。
涼介（滅殺術！！）
小さく呪文を唱えると、空気中に大きな刃が出現し、回転しながら鬼に向かった。

ーバシンッ！

「ぐあっ…。」

鬼が吉長を押し潰そうとした片手は切断された。

鬼は吹き出る血を押さえた。

乙葉「すご！
いつの間にあんな物を出せるようになったの！？」
春美「違いますよ。
あれは実際に出したのではなく、幻覚です。」
涼介・吉長の勇姿を、２人は所定の位置について見ていた。

乙葉「うそっ！でも鬼は痛がってるよ？」
春美「実際に鬼が攻撃を受けたのは、精神面です。」
（でも、それを続ける事ができるのは、相手が自分より下級の者のだけ…。そぅ長くは続かない。）
春美が予想した通り、鬼はすぐに立ち直った。

「ったく、びっくりさせやがって！」

鬼は、傷口から手を離した。

「「!?」」

傷口は既に塞がっていた。

春美（もう、もちそうにない…。）
春美はそう判断した。
春美「乙葉さん、行くわよ!!」
乙葉「ええ!!」
2人は飛び出した。

「お前は少しはやるなぁ。」

鬼は涼介を指差した。

「…だが、さっきの小娘共ほどじゃない。」

涼介「なっ!?」

「さっさと出せ！
小娘は…何処だぁぁぁ!!」

鬼は空に向かって叫んだ。
春美（乙葉さんは左に行ってください！）
春美は乙葉に意思を送ると、乙葉は黙って頷いた。
そして、2人は別れた。
春美「私はここにいるわ！」
春美は走りながら、自分の結界を解いた。

「…そこにいたか。」

鬼は涼介と吉長を無視し、春美を見下ろした。

鬼退治（2）

「やっと出てきたな。
…さぁ、さっきの続きをしよう！」

鬼は笑った。
春美「いいわよ！」
春美は立ち止まり、印を結んだ。
春美「上・天・下・地…」
するとそれに合わせるように、涼介が入ってきた。
涼介「左・在・右・無…」
そこに、乙葉も入ってきた。
乙葉「界・既・己・物・也…」
吉長は鬼が春美を見下ろしている時に、涼介から離れて、涼介と春美の直線上の丁度真ん中に立っていた。
吉長「貴・力・我・達・奪…」
そして４人は顔を見合わせた。

「「ここに、力を！！」」

４人が一斉に叫ぶと、４人が立っているところから白い線が出て、４人を繋いだ。

ースルルルル…

白い線は鬼まで伸び、鬼の邪気を吸いとった。

ードスン…

「な、何！？」

鬼は力が抜け、膝を地につけた。

「な…何をした…？」

涼介「これは宇宙家に代々伝わる秘術、邪気祓い（じゃきばらい）だ！」
乙葉「どう？…もう動けないでしょう？」
乙葉は家に伝わる秘術に誇りをもっていた。
それが故に、自信に満ちていた。
だが、鬼は再び立ち上がった。

「この程度の攻撃で威張られるとは……舐められたものだ。」

もちろん、乙葉は驚いていた。
乙葉「そんな…どうして！？」
鬼は先程までの邪気は出せなかったが、全て吸い採られてはいない事を証明した。
鬼は左足を上げた。
乙葉「！？」
下には乙葉がいた。
春美「乙葉さん、危ない！…逃げて！！」
春美はとっさに叫んだ。
しかし、霊力のすくない乙葉は、さっきの秘術の反動で動けなかった。
春美（いけないっ！！）
春美がそう判断する前には、体が勝手に走り出していた。
春美「だぁめぇぇぇ！！！」

春美は乙葉の側にたどり着くまでに結界を張った。

ードスン！！

鬼の重く大きな足が、降りてきた。
春美「くっ！」
乙葉「…春美ちゃん。」
春美は間に合い、鬼の足を見事に受け止めた。
春美（凄く重い…。
私だけじゃ、次はもたないっ！）
春美は乙葉を見た。
乙葉は振動で、腰を抜かしていた。
春美「立って！！逃げて！！」
そう言ったとき、鬼の第２撃の左足が降りてきた。

ードスーン！！！

春美「っぁ”！！」
さっきよりも強く重い振動が春美にかかった。

結界は何とか衝撃に耐え、乙葉は無事だったが、春美は一瞬の大きな衝撃に耐えきれず、気を失ってしまった。
乙葉「春美ちゃん！！」
乙葉は春美の側まで這って行った。

「しぶとい奴め…」

鬼は再び足を上げた。

「これで留目だ！！」

鬼は足を降ろした。

ードッスーン！！

1度目や2度目以上の規模の砂煙が運動場に立ち込めた。
砂と風圧で、校舎のガラスはほぼ割れていた。

乙葉「っ………あ、あれ？」
乙葉は鬼の足が降りてくる直前に、気絶した春美を守るために、春美に覆いかぶさったが、大きな音と風は来ても、痛みは来なかった。
不思議に思い、少しずつ目を開けて見てみると、目の前には2本の足があった。
見上げると、それは…。

鬼退治（3）

乙葉「…り、涼介くん？」

ーコク…

涼介は黙って頷いた。
乙葉と春美を助けたのは涼介だった。
涼介は、黙ったまま鬼の足を受け止めていた。

「…んん？」

鬼は足の下を覗きこんだ。
春美「う……ん？」
その時、春美は目を覚ました。
乙葉「あ、春美ちゃん！！」
春美「乙葉さん…それに、涼介くん。」
春美がその目で乙葉と涼介を確認した時だった。

ーザクッ！

涼介「！？」
涼介の脇腹に、鬼の大きく尖り茶色がかった爪が刺さった。
春美「涼介くん！！」
春美は目をまるくして叫んだ。
乙葉は何も言葉を発することができなかった。

ーシュッ…

涼介の体から爪が抜かれた。

ードバッ！

爪痕になった、体に開いた穴からは、深紅の液体が、まるで川から溢れでるかの様に流れ出た。

ーパシャーンッ！

やがて、涼介の体は、流れ出たその溜まりに倒れこんだ。
春美「り…涼…介く…ん？」
涼介からは、何の返事もなかった。
春美は体中から血の気が引いたかの様に、真っ青な顔色になった。
頭の中は、真っ白だった。

「…涼介！！」

沈黙の中”涼介”を呼ぶ声に、残った3人は我にかえって、涼介の死が現実であることを再度叩き付けられた。

声の主は、光輝だった。
光輝「涼介！…おい、涼介！！」
光輝は涼介の元に駆け寄った。
光輝「………涼介ぇ！！！」
光輝の必死の呼びかけに、ピクリと動かない涼介。
春美は静かに立ち上がり、涼介の体を揺すった。
春美「ねぇ……ねぇってば！」
だが、涼介が目覚めることはなかった。
春美「そんなっ…」
春美は自分の手を見た。

手は涼介の血で真っ赤に染まっていた。
春美「い…いや…」
春美の手は震えた。
春美「いやぁ！！」
春美の悲痛な叫びが響いた。

「なんだ、意外と呆気なかったな。こんなんじゃ、暇潰しにもならない。」

優々と余裕の笑みを露に出す鬼。
全員の憎しみの矛先は、当然鬼に向いたが、誰も鬼に飛び込もうとはしなかった。
皆、自分だけでは歯が立たない事・反撃に出ても、返り討ちにあうだけだ…と考えているのだ。
……ただ1人を除いて。

「…面白くないぞ、もっと楽しませろや！！」

しびれを切らした鬼が、また爪を立てた攻撃をして来た。
春美「…ゆる…さ…」
春美はスッと立ち、鬼を睨んだ。

ーシュッ…

鬼の爪が春美に当たる瞬間！
春美「許さない！！」
春美の心に鈴が共鳴した。

ーリィン…

春美からも鈴からも、強力な霊力が放出して鬼の爪を受け止めた。

「その程度でっ！」

鬼はもう片方の手も爪を立てて、攻撃してきた。

ーシュッ…

しかし、春美は簡単に受け止めた。
春美「…いらない。
お前なんか…いらない！
消えてしまえ！！」
春美から、今までとは違う霊力が出た。

ーシュワ…

それは、受け止めていた爪を融かしていた。

「何！？」

春美「…消えて、無くなれ！！」
春美の”融かす”霊力は鬼の体全体にかかり、鬼の体は融けていった。

ーシュワシュワシュワ…

「な…こんなところで！

…………くそぉっ！！！！」

鬼は完全に融けて消えた。

残ったモノ

鬼が融け消え、村を包む強大な邪気がなくなった。
だが、涼介を失った哀しみは大きくなるばかりだった。

ーストン

春美は地面に落ちたボールの様に、膝をついた。
春美「…涼介くん…」
涼介を守りきれなかったと、自分を責める春美。
光輝「っ…」
戦いに間に合わなかったと、光輝は悔やんだ。
そんな2人に、乙葉は何も言わず、優しく抱き締めた。
吉長は、3人の元に静かに寄り添っていた。

みんな泣き叫ぶことはせず、　ただ何も言わずに涙を流した。

そして段々夜は明け、朝日が差し込んできた。
乙葉「…取り敢えず、家に戻りましょ。力を沢山使ったでしょう？
休んだ方がいいわ。」
乙葉は春美の肩を支えながら、立ち上がった。
残った4人は、その場に背を向けて家にもどった。
戻る途中、誰も言葉を発する事はなく、沈黙の中黙々と歩いた。

家に着くと、春美はよろめきながら部屋に向かった。

春美「ただいま…。」
部屋の戸を開けるといつもの癖でつい、そう言ってしまった。
部屋には誰もいなかった。

春美（春恵ちゃん、まだ戻ってない。）
春美は、春恵の姿が見えないのを不思議に思ったが、今は何もしたくなかったので、そのままベッドに直行した。

ーチュンチュン…チュン

小鳥のさえずりで目を覚ました春美は、まず春恵のベッドを見たが、ベッドは空で、帰っていた痕跡はなかった。
春美（帰ってきてない…。）
春美は着替えを持って風呂場へと向かった。

朝シャンを終えてリビングに行くと、乙葉・吉長がいた。
乙葉「おはよ、春美ちゃん。」
春美「おはようございます…。」
吉長「…。」
みんなやはり、いつもとは違った。精神的なダメージは相当なモノだろう。
そんな中、リビングに光輝が来た。
光輝はコップに水を入れて飲んだ。
光輝「あ、あぁぁ。」
乙葉「おはよ、こぅちゃん。」
乙葉「あ…少し待って、朝ごはんの準備はもうできてるから。」
乙葉はキッチンから、味噌汁の入ったお椀を食卓に並べた。
光輝「俺…いらない。
今は、食べるとか気分じゃない。」
光輝はリビングから出ていこうとしたので、乙葉は呼び止めた。
乙葉「ダメよ！ちゃんと食べなさい！！」
しかし、光輝は部屋に戻っていった。

乙葉「ったく〜！
…あ、そう言えば春恵ちゃんは？
まだ具合悪いのかなぁ？？」
春美「え！？乙葉さんのところにいないの？
…私、てっきり乙葉さんのところにいると思ってた。」
乙葉「ん！？いないよ。
……じゃあ、春恵ちゃんはどこにいるの？」
リビングに残っていた乙葉・吉長・春美は顔を見あった。
吉長「俺は見てない。」
乙葉「私も…。」
春美「…いつから？」
3人は目を見開いて、ハモった。
「「昨日の鬼退治から！！」」

そして、春恵の捜索が急きょ、始まった。

消えた春恵の捜索（前書き）

はじめまして。
「鈴の音」を読んでいただき、ありがとうございます。
昨日ある指摘をいただき、今回から少し書き方を変えていこうと思います。
大きな変化ではありませんが、これから少しずつ変えていけたらいいなと思っています。

これからもよろしくお願いします
m（＿＿）m

消えた春恵の捜索

3人は家中をくまなく探したが、昼を過ぎても姿は見つからなかった。
その騒ぎに気づいた光輝は、ひょこっと部屋から顔を出した。
光輝「ん？何かあったの？？」
その時、廊下には乙葉がいた。
乙葉「あ、こぅちゃん！？
留守番中に春恵ちゃん見なかった？」
光輝「……見てない。
春恵ちゃんがどうかしたのか？」
光輝は首を傾けた。
乙葉「それが…昨日の夜から姿が見えないの！」
光輝「えっ！？」
光輝は驚いた。
乙葉「今、吉長と春美ちゃんの3人で探してるんだけど……どこにもいないのよ！」
光輝「…俺も探す！」
乙葉「ありがとう、助かる」
光輝は部屋から出た。

その頃、春美は倉の方に探しに来ていた。
春美「あぁ、もぅっ！
どこにいるの、春恵ちゃん！！」
春美は空に叫んだ。

ーよっつ
池の中の悪魔が放たれるー

その時、春美の頭にその言葉が響いた。
春美「何…？」
春美は頭の中で、今の言葉を繰り返した。
春美（池の中の悪魔が放たれる？
池の…？）
春美は倉と反対方向に向いた。
そこには、小さい池があった。
まさか…
春美

「…春美か？」
そこへ光輝がやって来た。
春美「…光輝くん」
光輝は春美の声で、今目の前にいるのは春美だと判断した。
光輝「あ、やっぱ春美だった…」
春美は首を傾けた。
春美「？」
光輝「あ、いや…。
2人って後ろ姿だと、どっちがどっちだか解らないって言うか…」
光輝は苦笑いした。
春美「よく言われる」
春美は笑った。
春美「…光輝くんも春恵ちゃんを探してくれてたんだね、ありがとう」
頭を下げた。
光輝「いや、今はこうやって、何かに没頭する方が…何て言うか、気が楽なんだ。正直、助かってる」
光輝は池を眺めた。
春美「光輝くん…」
掛ける言葉がなかった。
春美も池を眺めた。

2人は水面越しに目が合うと、直ぐに反らした。
光輝は落ち着いてはいたが、口を尖らせて倉の方を見た。
春美は逆に落ち着きなく、動揺しているようだった。
2人はそれ以上喋ろうとせず、沈黙が続いた。

ゾワッ！

そんな2人に、そっと水面下から近づいてくる者がいた。
その者は静かに池から頭を出した。
2人はそれに気づかなかったので、その者は地上に這い上がった。

春美「!?」
春美は背後から急に邪気を感じ、振り返った。
そこにいた者は、全身が深緑色で二足歩行をする腰の曲がった物体だった。
春美「何者!?」
光輝「何!?…うわっ！！」
春美はその者から跳んで距離をとった。
反応に遅れた光輝は、その者に両足を捕まれて、池に引きづり込まれた。

ジャパーン！

春美「光輝くん！」
春美は反射的に池に近づいてしまった。
春美「あ…」
気づいた時にはもう遅く、春美も緑色の手に足を捕まれた。
春美「キャー！」

ジャパーン！

そして、光輝と同様に池に引きづり込まれた。

春美（く…苦し…）
池の中では、息が続かなかった。
春美「ぐはっ！」
春美は水を吸ってしまい、意識が遠退いていった。

霞ゆく視界の中で最後に見た物は、光る池の底だった。

池の中の檻

ピシャ…ピシャ…

春美「う……ん？」
春美は水滴が落ちる音で目が覚めた。
冷たい石の床にうつ伏せで眠っていた。
服は水で濡れてびしょびしょだった。
春美「寒…」
春美は起き上がり、両腕を擦った。

カシャ…

春美「？」
足が自由に動かせなかったので見ると、鎖のついた重そうな鉄の枷(かせ)に繋がれていた。

春美がいた檻は真っ暗で、一面全てが石で覆われていて、鉄の格子が外に出るのを阻んでいた。
檻の外はランプ１つでうっすらと明るかった。

とりあえず、今の状況を整理した。
春美（えっと…池の前で話してて…）
春美は顔を上げた。
春美「光輝くん！」
春美は格子から顔を出して、外を見た。
必死で光輝を探した。

「う…」
隣の檻から、人の気配がした。
春美「光輝くん!?」
横を向いたが、隣の檻までは見えなかった。
春美（見えないっ!
隣にいるかもしれないのに…）
見えないもどかしさが焦りに変わったのは、池の前で感じた邪気が、
近づいてきている事に気づいた時だった。

ゾワッ

春美（あの時の邪気!!）
急いで頭を檻の中に引っ込めた。
そして、邪気の感じる方を注視した。
そこには鉄の扉があった。

ギイイィィ…

鉄の扉がゆっくりと開かれた。

「ん…目を覚ましたか」
さっきの全身深緑色の物体が、言葉を発した。
春美「…あなたは何?」
春美の声からは、緊張が伝わった。
「オイラ?オイラは河童!
河童の河助（かすけ）さ!!」
春美「河童…」
さっきの頭に響いた言葉が蘇ってきた。

一よっつ

池の中の悪魔が放たれるー

春美「池の中の悪魔…」
河助「そー呼ぶ人間もいる！」
春美（…と言うことは、こいつがよっつ目の封印されてた妖怪）
春美は警戒した。
河助「ん？」
ここで河助は何かに気づいた様で、檻に顔を近づけて、檻の奥にいる春美をじっくり眺めた。
春美「な…何よ！？」
河助「…いやアンタ、前に捕まえた奴に似てるなぁ」
春美「！？」
春美は直ぐにそれが春恵だと気づいた。
春美「その子、今どこにいるの！？」
河助「アンタには関係ないね」
簡単に教えてはくれなかった。
春美は質問を変えた。
春美「じゃあ、私と一緒にいた男の子はどこ？」
河助「ああ、そいつなら…」
河助は隣の檻に指差した。
春美（やっぱり）

ジャラ…

春美は枷を見た。
春美「ちょっと、これ…はずしてよ！」
河助「駄目だ」
河助は即答だった。
春美「何で？」
河助「アンタは霊力が強力だ！

そんな危険人物を、ただ檻に入れとくのは、危険だ！」
もっともだ。
春美「っ…」
春美は目を細めた。
河助「まぁ、気楽にしてろや
ちゃんと毎食は持ってきてやるからな」
河助はそう言って、また鉄の扉を開けて、出ていってしまった。
春美「ちょっとー！！」
春美は叫んだが、返事はなかった。

脱出

春美「ちょっとー！！」
広々とした牢獄はよく響いた。
春美「…なんちゃって♪」
春美は手に霊力を籠めて、足の枷に触れた。

パキンッ！

枷は容易に壊すことができた。
次に格子だ。
もう一度、手に霊力を籠め、連続する2本の格子を触った。

パキンッ…パキンッ

2本とも粉々になり、やっと体が通れる程の幅ができた。
春美はその幅をスムーズに通り、隣の檻を見た。
春美「光輝くん！」
光輝はまだ眠っていた。

春美はさっきと同様に、霊力で格子を壊し、中に入って光輝に駆け寄った。
春美「起きて、光輝くん！」
光輝「っ…」
檻の外からは気づかなかったが、光輝の呼吸が粗かった。
春美「？」
春美は光輝の額に手を当てた。
春美「・・・」
少し熱かった。

春美「熱がある」
春美は光輝の腕を肩に掛けて、立ち上がった。
春美「っ…、やっぱキツイかな？」
だが、そんなことは言ってられない。春美は踏ん張り、一歩…また一歩と進んでいった。

重い鉄の扉を開けて、薄暗い牢獄から出た。

ギイィィィ…

春美「っ！」
あまりにも外が眩しかったので、目をしかめた。
外は普通の家の様な壁に、高い天井。そして左右に長く続く廊下だった。

春美「どっちに行けば、出口があるの？」
春美は左右を交互に見た。

ゾクッ…

春美「！？」
左から邪気を感じた。
春美（さっきの…河助？
今会うのは危険だ）
そう思い、右に進んだ。
しかし、進んだ方向からも邪気がした。
春美（河童は1体だけじゃないんだ…）
とにかく、敵に遭遇しない安全な所を探して進んだ。

ゾワッ…

前の方から邪気を感じた。
春美（引き返すしか…）
春美は方向を変えて、戻ろうとした。

ゾワッ…

しかし、元来た方からも邪気を感じた。
両方とも春美たちの所に近づいてきていた。
春美（私１人なら何とかなるんだけど…）
春美はぐったりしてる光輝を見た。
何とか隠れられる場所はないかと、辺りを探した。
春美（………！）
少し行った所に扉があった。
春美（あそこに隠れよう！）
春美は急ぎ足で、その部屋の中に入った。

部屋は廊下より暗く、何があるか判らなかった。
だが今はここしかないので、春美は扉を閉めて、部屋の奥に行き、光輝を床に座らせ、扉の方向を向いた。
そして、いつでも戦える体勢になった。

ゾワッ…ゾワッ…

邪気は扉の近くまで近づいてきていた。
春美「…」
春美の首筋に汗が流れた。
心臓の鼓動も速くなった。

そしてふたつの邪気が扉の前を通る、緊張の一瞬が近づいてきた。
春美「！？」

だがその時は、一瞬で終わった。
邪気は、扉の前をただ通り過ぎていった。
部屋の中を気にする様子は全くなかった。
春美「はぁー…」
緊張が和らぎ、大きなため息をつくと、改めて部屋の中を見渡した。
真っ暗な部屋の中を、手を頼りに散策した。
するとテーブルの上に、ランプがあるのが判った。
ランプの隣にはマッチがあったので、それで火をつけた。

灯りのついたランプを持ち上げ、部屋を見渡した。
春美「…！！」
部屋で見えたのは、衝撃的な物だった。

部屋には天井まである棚が沢山あり、そこにはびっしりと小瓶や瓶が敷き詰められていた。
その瓶の中には、何かの液体に浸された人間の目玉や臓器が各々に入っていた。
またある棚には、人骨がきっちりと箱別けされていた。
春美「っ…」
吐き気をもよおす程の気持ち悪さに、春美の足元はふらついた。
春美「何…ここ」
他に言葉は出なかった。

ガタン！

春美はテーブルにぶつかった。

春美「……！」

そこで、目線はテーブルの上の書類に向いた。

脱出（2）

テーブルの上にあった書類は、”人身売買書”と書かれてあった。
春美「人身…売買!?」
ランプをテーブルに置き、書類をめくった。

めくると、顔写真・名前・性別・年齢の個人情報が記入されていて、その下には売られた体のパーツ名を記入する欄があった。
春恵の名前が書かれてないことを祈りながら、必死でページをめくった。

春美「……」
あるページで手が止まった。
春美「そ…そんな」
落胆し、床に膝をついた。

そこに書かれていた事、
そこに貼られていた写真、
それは紛れもなく春恵だった。
ショックのあまり、売られたパーツの欄を見てない春美。

ゾワッ…

その時、邪気が扉の前で止まった。
そして扉は開かれた。
河助「…見つけたぞ!
逃げるなんて、いけない子だ…お仕置きが必要だな」
河助は刃物のように尖った爪を立てた。
春美「よくも春恵ちゃんを…」

今の春美は怒り狂っていた。
春美はテーブルの上にあったナイフをすかさず手に取った。
そして腰を低め、ナイフを目の前に構えた。
河助「そんな物で！」
河助が襲いかかって来た。

スパン…

河助の爪は、避けた春美の腰まで伸びた長い髪を切った。
春美はショートヘアーになり、切られた髪は床に散らばった。
春美「…！」
次は春美が動いた。
春美は堂々と正面から河助に向かった。

シャキーン！！

ナイフと爪が重なり音を立てた。
河助「っ…」
河助は春美に圧され続けた。
そして息を呑む早さで振るったナイフが、河助の爪を切断した。
河助「あああ！！」
そして気を抜いた河助の背後に回り込み、河助の喉元にナイフを突き付けた。
春美「よくも春恵ちゃんを殺ってくれたわね！！許さないわ！！」
河助「ちょっと待て…う…待った待った待ったー！！！」
河助は必死で叫んだ。
春美「何を！人殺し！！」
それでも手を止めようとしない春美だったが、次の河助の言葉で止まった。
河助「い、生きてる！」

春美「は？」
春美は止まった。
河助「だから、生きてるって！！」
春美「春恵ちゃんが…」
そんなはずない！だって書類に」
すると河助は書類を手に取り、春恵のページの売られたパーツの欄を春美に見せつけた。
春美「売られたパーツ…全身」
書類を読み上げ、河助から書類を引ったくった。
春美「ど、どういう事なの！？
本当に…春恵ちゃんが生きてるの？」
河助「ああ、その女は霊力があったからな。丸々全身高く買い取ってもらったよ」
春美の声が高くなった。
するど、春美はもう一度ナイフを喉元に突き付けた。
河助「ひぃっ！！」
春美「誰が買い取ったの？」
河助は反射的に両手を挙げた。
河助「それは…言えない。うちのお得意様だからな。」
春美「何？言わないと…どうなるか解ってるわよね？」
ナイフの先が首筋に突いた。
河助「ひいぃ！！」
首筋から緑色の血が流れた。

光輝「う…」
その時、光輝のうなされている声で春美の殺意は消えた。
春美「…まぁ、いいわ」
春美はナイフを喉元から離した。
河助「っ…はぁー」
解放された河助は、腰が抜けて床に座りこんだ。

春美「あなたの命、見逃してもいいわ。
ただし、私と光輝くんを無事に地上に帰してくれたらね」
ナイフはテーブルの上に置かず、ベルトに引っ掛けて腰に巻いた。
河助「わ、判った」すぐに河助は立ち上がった。
春美は光輝の腕を再び肩にまわして、立ち上がった。
春美「出口に案内して！」
河助「ああ」
河助は扉を開けようとした。
春美「先に言っとくけど、
変な真似したらタダじゃおかないから」
すると、河助は何も言わずに扉を開けた。

春美は光輝を支えながら、河助に案内された通りに進んだ。

河助「ここだ」
河助はある部屋の前で止まった。
春美「…中に、邪気が2つある」
河助「いわゆる門番ってやつだ」
春美「そう…」
どうするべきか考えた。
そして考えた末、光輝を河助に託した。
春美「あなたを信用した訳じゃない。ただ、今は光輝くんをあなたに任せる」
春美「今だけだから。変な真似したら…」
河助「は？」
河助「解ったよ！」
河助は光輝を受けとると、光輝を肩に担いだ。
春美は一人でナイフを片手に、その部屋に入っていった。

春美は3分もしない内に扉を開けて、河助を中に入れた。
中の門番2体は、床に伸びていた。
河助「…アンタ、本当に強いな」
春美「まぁね、光輝くんありがと」
春美はナイフを床に突き刺して、光輝を受けとった。
春美「で、どうしたら帰れるの？」
河助は天井を指差した。
春美「あ…あの光！」
天井は、一面光っていた。
その光は春美が池に引きづり込まれた時に、消えゆく意識の最後に見たモノだった。
河助「あの向こうは池の中だ。
オイラはこれ以上上手を貸すわけにはいかない」
春美「解ってるわ、ここまでありがと」
そう言って回し蹴りを河助に喰らわした。

ドンッ！

河助は壁に頭を打ち、気絶した。
春美（さて、池の中という事は息がもつかどうか…）
天井を見上げた。
春美（結界を張れば、何とかなる…かな）
春美は光輝の回りだけ結界で包んだ。
そして結界を持ち上げて、光の中を通すと、春美は息を大きく吸って、光の中を通った。
河助が言った通り、光を抜けると池の中に出た。
春美は結界を泳いで持ち上げて、地上を目指した。

取引

春美「ん…」
目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。
時計は、10時12分。
カーテンは閉まっていたが、明るかったので今が朝であることは判った。
春恵の捜索をしていたのは昼間だったので、それからどれぐらい経ったのかは予想がついた。
春美「…あれから丸1日」
起き上がり、ベッドに座った。

その時、乙葉がやって来た。
乙葉「入るわね」
ノックをして、部屋に入った。
春美「乙葉さん…」
何があったのか聞こうとすると、先に乙葉が話始めた。
乙葉「驚いたわ！
春恵ちゃんを探していたら、春美ちゃんとこぅちゃんの姿も見えなくなるんだから。
私と吉長くんは、家中探し回ったのよ！」
春美「すみません…」
申し訳なく謝った。
乙葉「それで、何があったの？」
乙葉は勉強机から椅子を引いてきて、春美が座っていたベッドの横で座った。

・・・・・・・・・・・・・・・

春美は長々と池の中で見たこと、あったことを話した。
乙葉「……そう、だから池の前で倒れていたのね」
黙って聞いていた乙葉は、すぐに理解した。

春美は光輝が気がかりになった。
春美「あ、光輝くんは!?」
乙葉「大丈夫、部屋で眠っているわ」
すかさず聞いた。
春美「熱があったみたいだったけど…」
乙葉は春美を落ち着かせ、ゆっくりと話した。
乙葉「大丈夫よ、熱も下がってる。春美ちゃんがこぅちゃんを守ってくれたお陰よ」
それを聞くと安心したが、すぐに脳裏は春恵の事になった。
春美「春恵ちゃん…」
乙葉「それが問題ね。
一体誰に売られたのかしら」
場の雰囲気が変わった。
二人ともお手上げのようだ。

その時、春美は思い付いた。
春美「あ!」
急に発した声に、乙葉は驚いた。
乙葉「な、何!?」
春美「もう一度池の中に!」
意味が解らない乙葉に、続けて説明した。
春美「つまり、河童に協力してもらって、春恵ちゃんを買い取った所に乗り込むんです!!」
そのとんでもない発想に、乙葉は強く反対した。
乙葉「だめ!危険過ぎるわ!!」
春美も負けてなかった。

春美「でも一番手っ取り早い方法です！！」
それでも乙葉は退けなかった。
乙葉「ダメです！他に方法があるはず。時間がかかっても、別の方法を選ぶべきよ。」
だがここで諦めるほど、春美は物わかりのいい子ではない。
前にもあった通り頑固なのだ。
春美「じゃあ、乙葉さんは春恵ちゃんがどうなってもいいんですか！？」
乙葉はとうとう、次の言葉を発してしまった。
乙葉「あなたまで失うわけにはいかないのよ！」
返す言葉が出てこなかった。
黙ってしまった春美に、話を続けた。
乙葉「涼介に続いて春美ちゃんまでああなっちゃったら、私は…残された私たちはどうしたらいいの！？」
目は涙で溢れていた。
涼介の事は、まだ誰も乗り越えられてない現実なのだ。
既に反論はできなかった。

黙った春美に、乙葉は優しく声をかけた。
乙葉「…解ってほしい。
お願いだから、自分から危険な事はしないで」
眉間にシワが寄る。
乙葉「お願い…」
乙葉はそう呟いて、立ち上がった。
そして背を向けた。
乙葉「…昼食の準備をしてくるわ。この話は後にしましょう」
部屋の外に出ると、振り返った。
乙葉「大人しくしててね」
そう言って、キッチンに行った。

だが、春美は大人する気など全くなかった。
部屋からそっと抜け出して、池に行った。
春美（いってきます）
覚悟を決め、大きく息を吸うと池の中に飛び込んだ。

ザッパーン！

飛び込むと一気に底まで潜り、光の中を通った。
光の中を通ると、河助を蹴った、あの部屋に出た。
あの時いた門番の河童はいなかった。
春美「はぁ…はぁ…はぁ…」
床にはナイフが刺さったままだったので、引き抜いて、またベルトに引っかけた。

ゾワッ…

邪気がこの部屋に近づいてきた。
春美（この邪気は…）
邪気で個人の特定ができた。

キイィ…

扉が開いた。
「あ、アンタ…何しに！？」
河童は春美に気付き、驚いた。
春美「取引しましょ？」
春美はリラックスして話ができた。

取引（2）

ギイィ…

扉が開き、中に入ってきたのは河童の河助だった。
河助「やっぱりアンタか…」
春美が来ていたことを理解していたようだ。
それだけ、春美の霊力は強く特徴的なのだろう。
春美「元気そうね」
河助「ああ、お陰さまでな！」
今の言葉には、あの時に蹴られた恨みがこもっていた。
しかし、春美は軽く受け流した。

河助「…アンタ、何しに戻ってきたんだ？」
すると、春美は両手を組んだ。
春美「勿論、春恵ちゃんを助けに来たに決まってるでしょ！」
河助は春恵が誰なのか、すぐに検討がついた。
河助「そんなの、無理だ！」
春美「やってみないと判らないでしょ？」
春美は余裕の笑みを浮かべてみせた。
河助は目を点にした。

しばらく無言の時間が流れた。
その時間を止めたのは、河助の大きな笑い声だった。
河助「…ガ、ガハハハハハハッ」
春美は顔をしかめた。
河助「ハハッ…止めておけ。
アンタの強さは解っている。
だが、奴等に敵うはずがない！」

河助は笑った後、真剣な表情・低い声になった。
春美「…たったあれだけの戦闘で、私を解った気でいるようね」
まるで、本気を出していないと言わんばかりの言葉だ。
河助「…もっと力を出せるのか？」
春美「やってみせる！」
春美の意志は強く、真っ直ぐな瞳で河助を見た。
河助「…それで、俺は何を？」
春美「私を、春恵ちゃんを買った奴の所に連れていってほしい。
それで、私を売ってくれればいい。」
春美は本気だ。
だが、河助は呆れた。
河助「本気か？」
春美「本気よ」
即答した。
春美「売って儲けたモノは、自由に使ってくれていい」
河助「ハハハッ！！」
また大きな声で笑った。
河助「それでアンタは大丈夫なのか？」
春美は胸に手を当てた。
春美「大丈夫よ！
私は強いからッ！！」
河助の口角が上がった。
河助「自信満々だな」
河助はじっと春美を見つめて考えた。

そして、結論を出した。
河助「…解った。取引だな」
春美「そうよ、取引しましょ！」
2人は協同の証に握手した。

河助「じゃあ、ついてこい！」
河助はひょいっと手招きして、扉を開けた。

春美「？」
春美は誘導されるがままに、ついていくと、別の部屋に入った。
春美「ここは？」
春美は部屋を見渡した。
河助「ここは色々な道具を保管してる倉庫だ」
そう言って、沢山段ボールが積んであるなかから1つを取って中をあさった。

そして手枷を取り出した。
春美「ん、手枷？」
手枷を受け取ると、首を傾げた。
河助「それをつけろ！」
春美「え！？何で？」
顔を上げた。
河助「乗り込むんだろ？
……売り物として」
春美「そっか…」
納得すると、すんなり手枷をつけた。
それを確認すると、河助は春美を肩に担いだ。
春美「うわっ！？え、ちょっ…！」
驚いて、ばたついた。
河助「…大人しくしろ！
行くぞ、裏市場に！！」
春美「裏市場？
どうやって？？」

ズン…

突然床に河助の足が沈みだした。
春美「！？」
目を丸くして下を見た。
河助「変に霊力使うなよ！
次元を越えるんだ。
事故は起こしたくないだろう？」
河助は念を押した。
春美「解った」
春美は頷いた。

あの時…（前書き）

光輝の視点で書いてみました。

初めての事なので、読みにくかったりするかもしれませんが、どうかお付き合いください（。＿。）（。＿。）

あの時…

俺は池の前で春美と話していた。

「何者！？」

急に春美が後ろに跳び退いた。

ドッ！！

その直後、俺は後頭部に激しい痛みを感じ、地面に倒れた。

最後に見えたものは、深緑色の何かだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次に目が覚めた時には、冷たい檻の中だった。

俺はうつ伏せで眠っていた。

服が濡れてる……寒い。

頭が痛い…ボォッとする。

こりゃあ、熱があるな。

体が重く、思い通りにならない。

瞼も開けるのが困難だ。

ふかふかのベッドが恋しくなるよ。

「光輝くん…」

誰かが俺を呼んでる。

涼介か…？
いや、これは……春美だ。

春美はつい最近うちに引っ越してきた双子だ。

あれ…？
春美と春恵、どっちが姉で妹だっけ？？
……まぁ、どっちでもいいか。
それから、春美は強力な霊能力者だ。
涼介以上の。

そういえば、涼介は何処にいるんだっけ？

今日はまだ見てないなぁ。

……あ、そういえば昨日・・・

まだ信じられない。

あんなに強い人だったのに。

俺は涼介を守れなかった。

そりゃ、俺には霊力なんて洒落た力は持ってない。

無力だ。

何ができただろう？

だが何かができたはずなんだ！

俺に…何ができただろう？

そう考えていると、微かに開いた瞼からうっすらと今いる檻の光景が見えた。

誰かが俺を支えてくれている。

俺はしっかりとしない足取りで、牢獄から出た。

長い髪が見える。

春美もしくは春恵だ。

さっきの声は春美だったな。
じゃあ、今俺を支えてくれているのも春美か。

あーあ、双子の見分けって難しいな。
そっくりすぎだ。

しばらくの間、春美が俺を支えながらの移動が続いた。

歩くの嫌だなぁ…

ずっと寝ていたい。

そんな俺に歩く気力を与えたのは、隣にいた春美だけでなく、左手首にはめている七色のブレスレットだった。

力のない俺にも、コイツ（ブレスレット）から力を与えられてるのが判った。

宇宙葉嗣が力をくれている。

足は意志と関係なく、動き続けた。

だが、俺はある部屋で座らされた。

暗くて何も見えない部屋だった。

春美が何かしている。

微かな明かりがついたのは判ったが、部屋の中に何があるのかは判らなかった。

だが、何かがある。

「そ…んな…」

春美の悲しい声が聞こえた。

何があったんだろう？

目の前に悲しんでる奴がいるのに、また俺は何もできない…。

＞カチャ…＜

その時扉が開いた。

「よくも…春恵ちゃんを！」

春美の声が怒りに変わった。

そしてよくわからないが、激しい戦闘を始めた。

春美と…深緑色の物体？がチラチラと見える。

＞シャキーン！＜

鉄が擦りあう音が聞こえ、
2人？は止まった。

「ちょっと待て…う…待った待った待ったー！」

直ぐに、春美のじゃない声が命乞いをしていた。

…ということは、春美が勝ったのか？

でも、誰かが死ぬのを見るのはもう嫌だ。

特に春美には、誰の命も奪って欲しくない…。

「う…」

これが俺の出せる精一杯の声だった。

・・・この後どうなったのか。
正直な所、覚えていない。

ただ、誰かに担がれたのを消えていく視界の中で見た。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次に目を覚ました時は、俺の部屋でベッドの中だった。

もどってこれたようだな。

やっぱ、ふかふかのベッドが最高だ！

春美のお陰だ。
後で礼を言っておかないと…

訪れた吉長が、春美の起床を教えてくれた。

熱もないし、体が自由に動かせる…春美に礼を言いに行こう！

足取りは軽く、俺は部屋を出た。

そして、春美が居るであろう部屋の前で止まった。

＞トントントン…＜

・・・・・
ノックをしたが、返事がない。

また眠ってしまったのだろうか？

気になった俺は、ドアノブを回した。

「俺…光輝だ。いるのか？
入るぞ、春美」

だがなかに入ってみると、部屋はもぬけの殻だった。

春美がいない…

トイレか？

そう思い、一階に降りたとき、池の方から音が聞こえた。

＞ザッパーン！＜

「！？」

池に飛び込む音だ！

急いで池まで行ったが、誰もいなかった。

俺も行こうか…

池を眺めて思った。

だが、その一歩は踏み出せなかった。

……俺に、何ができる？

その時の俺には、大切な人を失う恐怖だけがあった。

あ、俺にとって春美は失いたくない、大切な人なのか……

その時初めて俺自身の気持ちが判った。

河童の河介に担がれ、次元を越えて裏市場にやって来た春美。
裏市場は薄暗い空間で行われていたが、広く色んな店が並んでいて
にぎやかで、色んな生物で溢れかえっていた。
春美「ふーん、けっこうにぎやかなのね。”裏市場”と聞いて、もっと静かで素っ気ないイメージをしていたの」
担がれながらも、見たことのない生物や売り物を観察していた。
河介「そうか？
人間の想像力はちっぽけだなぁ」
河介は笑った。
だが河介には見向きもせず、辺りを見た。
春美「あ、あれ何？」
手枷で両手が繋がっているので、両手でモノを差した。
河介「ん？」
河介はその方向の店に寄った。
「へい、いらっしゃい！
安い・速い・新鮮がモットーの”食品屋ＰＩＮＮＢＥ”だよ！！
河童のアンちゃんには、主食の生肝を安くしてやるよっ
見ろ、この艶やかな血色の新鮮な肝を！匂えばヨダレが垂れてくること間違いなし！！」
活気ある、よくわからない生物のおじさんだ。
河介「美味そうだな…」
河介は顎に手を当てて考えた。
春美「おじさん、それは？」
横から春美が聞いた。
「これはリニチミュカ族の祝いの席で出される高級食品だよ」
春美（リニチ…ん？）
「エルボを主食とするトニハの肉さ！一個買うかい？」

春美「いらない」
「だろうね。見たところ、君は客というより商品だろう？」
おじさんの目は手枷に向いていた。
河介「ああ！人間の霊能力者だ。
捕まえるのに苦労したよ」
河介は春美を叩きながら話を合わせた。
「ハハハ、お互い様だな。
レアなモノは手に入りにくいのさ。…それで、生肝買うかい？
同業者のよしみで、もっと安くしてやるよっ」
おじさんのウィンク攻撃がきた。
河介「…そうだな、後でまた寄るよ！」
するとおじさんは生肝を手に取った。
「そんじゃあ、予約品として取っとくよ！その商品、高く売れるといいな」
親切なおじさんだ。
「うちも繁盛するってもんよ！」
…親切？なおじさんだ。

河介「ハハハ！」
河介は笑いながら手を振り、店を後にした。

春美「世界って広いね。
聞いたことのない言葉ばっかり」
辺りを見渡しながら、ボソッと口に出した。
河介「人間は、次元を越える力はないからなぁ」
河介も辺りを見渡した。

その後も春美は他にも珍しいモノを見つけては両手で差して、河介や店の者に説明をしてもらった。

しばらく歩いていると、河介は1人で話始めた。
河介「オイラたち河童は最近まで宇宙葉嗣に封印されてたから、封印が解けた後ここに来るのは二回目だ。
200年前、突然宇宙葉嗣に封印されてた。
悪さをするやつもいたが、穏やかに暮らしをたてていたやつもいた。
人間と共存してるやつもいた。
河童は人間と共存してる方だった。
だが、突然の封印…。恨んだね、人間を…」
春美は黙って聞いていた。
河介「河童は1年に1人の生け贄を裏市場で売って、生計をたてていた。それが人間との取り決めみたいなモノだったんだ。」
春美（雪女も同じような事を言ってた）
春美はさっきまでとは違い、急に大人しくなった。
春美「…宇宙家に引っ越ししてから色んな妖怪を滅してきたけど、雪女や河童の話を聞いて、よく判らなくなってきたよ」
春美は胸に下げてる鈴を握った。
河介「…雪女も河童と同じで、穏やかに暮らしをたてていたやつがほとんどだったはずだ」
春美は頷いた。
春美「…雪女に聞いた。
何かさ、悪いのは人間みたいだ。人間の都合で妖怪を封印してさ。
何か、悪いね」
春美は下を向いた。
河介「…アンタみたいな人間がいたら、また共存できるのかもな」
その言葉に春美は反応した。
春美「ダメだよ、生け贄なんて許せない。生け贄なしに、共存できないの？」
河介は黙った。

裏市場（2）

河介に担がれて、裏市場につれてこられた春美。

河介はある店に寄った。
春美「？」
こじんまりとした店で、店先には何も商品を置いていなかった。

「いらっしゃい」
帽子を深く被る、おそらく年配位の男性が話し掛けてきた。
河介は声を小さくして、春美を叩いた。
河介「例の物だ。」
すると年配の男性は意味が通じたのか、何も言わずに店の奥に河介を通した。
春美「…河介、ここって？」
河介「黙ってろ。
もう奴等の敷地に入ってるんだ」
春美（奴ら…？）
疑問を残しながら、春美は人身売買の現場に見事潜入できたのだ。

「おや、あなたは河童の河介ではありませんか」
ランプを持った青い肌の人に似た生物が、河介を見て近づいてきた。
河介「おう」
軽く挨拶をして、青い肌の人に近づいた。

「どうなさったんですか？
先日に来たばかりではありませんか」
河介「いや、予定外なんだが、
アンタの欲しがる物が手に入ったんでな」

河介は上手い口調で話を進めた。
河介「こいつは前に売ったやつよりも強力な霊力の持ち主だ。」
「ほぅ…」
青い肌の人は、春美に興味をもったようだ。
河介「どうだい、
買ってくれるか？」
「そうだな…」
青い肌の人は春美を下見した。
そして紙とペンを出した。
「この位でどうだ？」
青い肌の人は紙に値段を書き、河介にだけ見せた。
河介「…だめだ。
その値段じゃ売れないな。
もっと高くできないのか？
捕まえるのに苦労したんだぞ！」
どうやら、河介は見せられた値段に不服のようだ。
「これ以上高く…か？」
青い肌の人は、持っていたペンで頭を掻いた。
河介「………必要なんだろ？
霊力のある人間が」
河介は相手の顔に下から顔を近づけた。
貸した金を奪いにやってくるヤクザのような脅しだ。

「…仕方ない。
いくらならいいんだ？」
青い肌の人は河介に紙とペンを渡した。
河介「ふむ…」
河介は紙に希望の値を書き、青い肌の人に返した。
「こ、こんなに！？」
驚きの値段に、青い肌の人は絶句した。

…
春美
春美からは値段のやり取りが見えないので、退屈していた。
「こんなにも出せんよ」
河介「なら…」
河介は値段を書き直した。
青い肌の人はそれを見ると頷いた。
「ん、これなら」
河介「交渉成立だ」
河介は春美を下ろし、青い肌の人に引き渡した。
春美「…」
春美は青い肌の人に恐る恐る近づいた。
「では金だ」
青い肌の人は金の入った包みを3袋渡した。
河介「まいど」
河介は受け取ると上機嫌にもと来た方へ戻っていった。

春美は青い肌の人に腕を捕まれた。
「行くぞ、来い!!」
青い肌の人に引っ張られ、春美は春恵が連れていかれたであろう世界に乗り込んだ。

再開

春美は青い肌の人に連行され、裏市場からまた次元を越えて、新たな世界に足を踏み入れた。

その世界には、草木・植物が一切なく、荒れ果てた土地だった。
周囲は平野だが、家一軒も見当たらない、へんぴな場所だった。

春美「どこに行くの？」
情報を収集しようと話しかけたが、返事はなかった。
春美「あなたは誰？」
しかし、返答はない。
春美「…私は春美。
あなたの名前は？」

・・・・・

ここまで話しかけても、返事はなかった。
春美もどうにか、この青い肌の人を喋らせようと、意地になってきていた。

春美「…なぜ、霊能力者が必要なの？」

春美「ちょっと、聞いてる？」

結局、青い肌の人は喋らなかった。
無言の中、２人は歩き続けた。

春美「ねぇ…あなた、
私と同じ顔で、私より髪が長い女の子知らない？」
春美は早急に話を進めようと、
遠回しに話を聞いていく方法を
一変し、直球に話をした。
。

ピクッ！

青い肌の人は止まった。
春美「知っているのね！
教えて…私の双子の姉なの！！」
春美は青い肌の人の正面に立った。
「双子…姉…」
その時初めて青い肌の人が話した。
「…あなたが春恵さんの妹様なのでしょうか？」
青い肌の人は、春恵の事を知っている様だ。
春美「そうよ。春恵ちゃんを、探しているの…」
すると青い肌の人の態度が急変し春美を敬うようになった。
自由を奪っている手枷を壊し、深く頭を下げた。

「…数々の無礼、お許しを」
春美「え…」
春美は怖くなり、一歩退いた。
「私はビスデと申します。
春恵さんの元にご案内しましょう」
ビスデと名乗った青い肌の人は、進んでいた方向を変え、
別の方向に誘導した。
春美は急なビスデの対応についていけてなかった。

ビスデに手枷を壊された時から、固まっていた。
ビスデ「どう…なさいました？
さぁ、こちらへ」
手の先を別の方向に向けた。
春美「…ええ」
春美はビスデの誘導について行った。

しばらく歩いていると、広大な岩場が見えてきた。
春美「え…ここは？」
ビスデ「この奥に、春恵様が
いらっしゃいます」
そう言って、ビスデは岩と岩の間に空いた、大人が1人入れるよう
な穴を差した。
春美は恐る恐る、穴の中に入った。
春美（か…春恵ちゃん？）
心で春恵を呼んだ。
（え！？春美ちゃん？）
すると、春恵からの心の声が聞こえた。
春美「いる…春恵ちゃんだ！」
嬉しくなり、春美は走り出した。

走って行くと、暗い穴の中に明るい光が見えてきた。
春美「春恵ちゃん！」
春美はそこに飛び込んだ。
春恵「春美ちゃん！」
春恵も立ち上がり、春美を受け止めた。

ギュウ…

２人は再開を喜び、抱き合った。

そしてお互いの顔を見あった時に、春恵は気づいた。
春恵「あれ…？
どうしたの！？その髪…」
短くなった髪を見て、まず春恵は驚いた。
春美「ああ…これは河童と戦った時に切られちゃった。」
春美は髪を触った。
春恵「河童と………」
春恵は責任を感じていた。

春美「あ、でも…
この世界に来るのに、河童には協力してもらったの。
結構いい妖怪だったよ」
春美は笑った。
でも、少し恥ずかしそうにもしていた。
春美「変…かな？」
春恵は春美の髪を触った。
春恵「ううん、似合ってる。
前よりもいいじゃん。
私も戻ったら真似しよ…」
春恵は笑った。

その時、
春美は"春恵を連れ戻す"という本来の目的を思い出した。
春美「あ、そうだ！？」
春恵「？」
春美は春恵の両手を握った。
春美「帰ろう、春恵ちゃん！
…涼介が亡くなって、私だけじゃあ手に負えないの。

これからもっと強い封印されたモノが出てくるかもしれない…」

春恵「!?」
この時、春恵は初めて涼介の死を知った。
春恵「り、涼介くんが死んだ…?
う、嘘でしょ?」
春美「いいえ」
春美は下を向いた。
春美「本当の…現実よ」
春美の声は震えていた。
春恵「そんな…」
春恵にとって身近な人の死は初めてだった。

無言になったこの空間を終わらしたのは、春美でも春恵でもない女だった。
「悪いが、まだ春恵を帰させる訳にはいかん」
女は立ち上がって、春美の前に立った。

天使族の天使と叫び山の魔王

「悪いが、まだ春恵を帰させる訳にはいかんな」
女は立ち上がって、春美の前に立った。
春恵「ソフィーナ…」
春恵は隣にいた女をそう呼んだ。

ソフィーナと呼ばれたその女は、１５０と小さめの身長で、春美と春恵より頭ひとつ分小さい。
だが金色のウェーブがかった髪は春恵の腰まで伸びている髪よりも長い。
愛らしい藍色の瞳に、真っ白なワンピースがよく似合っている。

春美「…誰？」
ソフィ「我は天使、ソフィーナ。母からの命で魔王を倒しにきた！」
春美「天使…魔王？」
混乱する春美に、春恵は説明をした。
春恵「その方は天使族の長の娘、ソフィーナ。その長である母親に魔王を倒す命令を受け、
この世界にやって来たらしい。

あ、天使族っていうのは私たちの世界とは違う世界の住民で、
魔王っていうのは今いるこの世界を支配してて、”叫び山”と呼ばれている山にいる王さまなんだ。
魔王は、ソフィーナの世界の住民を拉致しては、厳しい労働を強いらせているらしい」

説明を終えると、春恵は春美を真っ直ぐに見た。
春恵「…私は魔王に届けられる

はずだったんだけど、偶然にもソフィーナに会って助けてもらったんだ。だから…私はソフィーナたちの役に立ちたい！
まだ帰るわけにはいかない！」
真っ直ぐな思いを春美に届けた。
春美「春恵ちゃん…」
春恵「それに魔王は私たち人間も同様に、拉致や人身売買をして集めた人に厳しい労働を強いらせている…」
春恵の声は段々低くなっていった。
春美「………判った。
春美は微笑んだ。
私も協力するわ！帰るのは、これが解決してからね」
春恵は再び抱きついた。
春恵「ありがと、春美ちゃん！」
ソフィ「我からも礼を言う。
ありがとう、助かる」
ソフィーナは頭を下げた。
春美「春恵ちゃんを助けてもらったお礼ですから」
春美はソフィーナに頭を上げさせた。

その時、入り口を閉じて
歩いてきていたビスデが到着した。
ソフィ「すまない、ビスデ」
ビスデ「いえ、ソフィーナ様の命令は絶対ですから。春恵様のお願いでもありましたし」
ビスデは頭を下げた。
春美「？」
春恵「ビスデさんに、
もし春美ちゃんが来たら連れてきてって、お願いしてたの」
すかさず春恵は説明した。

すると、ビスデは笑った。
ビスデ「ですが、春恵さんに教えていただいていた春美さんの特徴と春美さんが違ったので、
話を聞かなければわかりませんでした。」
ビスデは春美の髪を見た。
春美「ああ…髪ね」
春美はまた髪を触った。
春恵「…ごめんなさい、
ビスデさん」
するとビスデの方が申し訳なさそうに、謝った。
ビスデ「いえいえ！
私がしっかり顔を見ていればよかったということです…」

「ソフィーナ様…」
そこに、ビスデと同じ青い肌の人がもうひとり、やって来た。
ソフィ「おお、デルダか。
ご苦労であった。…それで、城の方はどうであったか？」
ソフィーナの耳元に寄って、デルダは報告をした。

春美「…誰？」
春恵「あの人も仲間で、城の偵察が役目のデルダさん」
2人はデルダを見た。
すると、報告を終えたデルダも
春美と春恵を見た。
デルダ「…初めまして、デルダと申します。春美さんですね？」
春美「はい」
デルダは手を出した。
デルダ「どうぞ、よろしく」
春美「よろしく」
2人は握手した。

デルダと春美の挨拶が終えると、ソフィーナが話始めた。
ソフィ「…皆、聴いてほしい。
デルダからの報告で、現在魔王は城を離れ、別世界へと足を運んでいる。今が仲間を助け出すのに
最大のチャンスだと、私は思う！…どうだろう？
皆の意見が聞きたい」
ソフィーナは、皆を見た。

春恵「行こうよ、みんな！」
春恵はソフィーナに賛成した。
春美「そうね、一番の難解の魔王がいないのは有利になると思う。
私は賛成」
春美ものった。

ビスデとデルダはソフィーナの命令は絶対なので、
春美と春恵が賛成すれば、
もうそれは決定だった。

ソフィ「よし、行こう！
叫びの山に…」
ソフィーナは気合い十分だった。

叫び山の城

春美たちは城が見えてくると、ふた手に別れた。
春恵とビスデは城の正面でおとり役を、春美とソフィーナとデルダは城内に侵入する役に別れた。

春恵「さて、始めましょうか？」
ビスデ「はい！」
2人は叫び山の城の正面で、仁王立ちした。

リィン…

その時春恵の腰で、あの鈴が揺れた。春美が春恵の安全のために、春恵に持たせていたのだった。
春恵「まずは門を壊そう！」
春恵は先に走り出した。
そして霊力を両手に溜めて、鋼鉄の門に突撃した。

ドカーンッ！！

春恵が門に衝突すると、大きな衝突音と震動が発生した。
しかし門は丈夫で、春恵が突撃した所だけへこんでいた。
春恵「…まだまだ、もう一度」
ビスデ「春恵さん、危ない！」
春恵が門を背に、距離を取ろうと下がった時だった。
門の上から薙刀を持った、ハエのような体の兵士が春恵に斬りかかった。
春恵「!？」

春恵はビスデの言葉を受け振り返ると、目の前まで降りてきていたその兵士の、大きな丸く赤い目に自分の姿が写っているのが見えた。
兵士は薙刀を振り上げた。
その時、ビスデが兵士の背後に周り、兵士を槍で切りつけた。
「ぐあっ！！」
兵士は春恵の目の前で、緑の血を噴いて、薙刀を振り上げた状態のまま倒れた。
ビスデ「油断してはいけません」
春恵「…はい、ありがとう」
２人は門の上を見上げた。

そこにはさっきの兵士と同じような生き物が、異常を察知して、沢山集まっていた。
春恵「うっわ…」
ウジャウジャと群れる兵士は、気持ち悪い以外何でもなかった。
ビスデ「さぁ、やりましょう」
春恵「…うん」
春恵はさっきの兵士の薙刀を取った。
春恵「派手に暴れるよっ！」
押し寄せるウジャウジャな兵士たちに、２人は一斉に斬りかかった。

その頃春美たちは、門での戦闘が始まった頃に城内に侵入した。
手薄になった城は、動きやすすぎる位誰もいなかった。
デルダ「こちらです！」
デルダの案内で、春美とソフィーナは進んだ。
目指すは、厳しい労働を強いらされている労働者が閉じ込められている牢屋だ。労働者の中には、天使や人間がいる。
春美たちは、そんな人々等を助けにやってきたのだ。

３人が廊下の突き当たりの角を走り曲がった時、行く手には、とかげのような尾がついた生物が2体いた。

シャキーン！

春美は腰に下げていたナイフを抜いて構えた。
デルダは槍を構えてソフィーナの前に立った。
春美「この場は私に任せて！」
春美は１人で2体を相手に戦った。
デルダはソフィーナが怪我をしないように護衛した。

シュッ…シュッ…

春美は１体の腕を切り落とした。

「痛い痛い痛い痛い！！」

最初は効いているかのように見えたが、痛がっていたのは初めだけだった。
切断された所からは、新しい腕が生えたのだ！
春美「すごい再生能力…」
春美は目を丸くして驚いた。

春美は下がった。
「あー痛かった…」
とかげのような尾がついた生物は爪を立てて、長い舌を出した。
春美「キモ…さっさと消えて！」
ナイフを構えてもう一度その生物に向かって走り出した。
「クォォ！！」
その生物も雄叫びをあげて、春美に向かって走り出した。

シャキーン！

ナイフと爪が重なり火花が散った。
春美「く！」
真っ直ぐと入ってくる爪を、
ギリギリで避けながら、反撃のタイミングを狙った。

シャーン！！

春美「!?」
別方向から、もう一体の生物の爪が入ってきた。
春美は結界を張って受け止めた。
「やるなぁ…」
春美「そんなんに褒められても…嬉しくないし」

ザン！

最初の一体の方の爪が、目を離した隙に振りかざされ、春美の右頬と右肩に五本の傷跡が刻み込まれた。

春美「痛…」
春美の目の色が変わった。
「何だその目。やろってのか？」
「やってみろや！！」
2体は挑発した。

サッー

「「え…？」」
挑発の直後、2体の間に風が流れた。そして目の前にいた春美は、2体の背後にいた。
「何が…あった？」
そう言いながら、2体は倒れた。
バターン…

ソフィ「…何をしたのだ？」
春美はナイフについた2体の血を振り払った。
春美「ナイフに霊力を…
しばらく再生できないようにしただけ。先に進みましょ？」
ソフィ「そ、そうか」
デルダとソフィは、倒れている2体の間を通って先に進んだ。

3人は牢屋のある地下に進む階段を見つけ、降りていった。長く地下に続く螺旋の階段、その終わりはまだまだ先のようで、見えない。
春美「どこまでも続いてるみたいね」
ソフィ「ああ…」

ピタッ…

その時春美が立ち止まった。
ソフィ「春美、どうかしたか？」
春美（今…何かが）
春美は胸を抑えた。
ソフィ「春美？」
デルダ「春美さん？」
2人は春美を見た。
春美「…ううん、何でもない」
ソフィ「そう。なら、行くぞ？」
再び3人は階段を降り始めた。
春美「うん」
春美は上を見た。
春美（今のは春恵ちゃん？
一瞬霊力に変化が…）
春恵の身に何かあったかと思うと心配でならないのだった。
だが、今の春美がやらねばならない事は捕らえられた人々の解放。
まずはそちらが最優先事項。
春恵の事は、祈るしかない。
春美はただ無事だけを願いながら、階段を降りていった。

階段に終わりが見えてきた。
周りが石で囲まれている広い空間だった。そこに、いくつもの牢屋があった。
明かりは壁にかかった3本のロウソクだけで、牢屋の中を照らす物はなかった。

ソフィ「ここに我天使族の勇敢なる兵士はおらんか？
我は長の娘、ソフィーナ！」
ソフィーナは大きな声で話しかけた。
すると、ソフィーナという言葉に反応した天使族の者たちが、格子

の隙間から顔をだした。

「ソフィーナ様？」
「い、今確かにソフィーナ様の名が…」
すると、ソフィーナが微笑んだ。
ソフィ「我、ソフィーナはここにおる。…デルダ！」
デルダ「は！」
デルダは格子に手を触れた。

ジュワ…

すると、デルダの触れた部分が溶けだした。
春美「すごい…溶けてる」
格子は完全に溶け落ち、中の人々が出れるようになった。
ソフィ「デルダ、他の者も出してやってくれ」
デルダ「はい、かしこまりました」
デルダは別の格子を溶かしに行った。

ソフィ「…大丈夫か？」
ソフィーナは中の人々に手をさしのべた。
「ソフィーナ様…」
中から天使族の人々が出てきた。
「おお、ソフィーナ様をこの目で見られる事ができるとは…」
出てきた人々は、ソフィーナに感謝の意を示した。

春美「………」
その時、ソフィーナの隣で春美は考え事をしていた。
春美（さっき、春恵ちゃんの霊力が揺らいだ？
…何かあったのかもしれない。

ここはもう大丈夫そうだし、
上に行ってみようかな…）
春美は上を見た。
ソフィ「…先程から、
どうしたのだ？そんなに春恵が気になるのか？？」
ソフィーナは春美の行動を気にかけていた。
春美「ちょっと…ね。
…私、先に上に行っていい？」ソフィ「構わんが…」
ソフィーナは春美に微笑んだ。
ソフィ「気を付けるのだぞ！」
春美「はい」
春美は直ぐに階段を駆け上がっていった。

春美は螺旋の階段を駆け上がり、城の廊下に出た。
廊下はやけに静かだった。
春美「…怪しい。何故こんなに静かなの？」
春美は窓から外の様子を伺った。
外も静かで、音ひとつしてなかった。
春美「静かすぎる…」
春美は目を閉じて、遠くにいるであろう春恵の心に話しかけた。
春美（春恵ちゃん…？）
しかし、春恵からの返信はなかった。
春美（何かあったとしか…）
春美は春恵の霊力を感じとろうとしたが、感じとることができなかった。
春美「…おかしい」
さらに集中し、繊細な力も感じ取ってみた。

ゾクッ！

春美「！？」
その時すごい妖力が、廊下を流れてきた。
春美「な、なんて迫力…こんなにすごい妖力、感じたの初めて」
集中して感じやすい体になっていたので、大きすぎる力に春美はよろめいた。
春美「行ってみよう！
春恵ちゃんの霊力を感じられないのに関係があるかもしれない」
春美は霊力を感じる方を目指して歩きだした。
妖力を感じる所に近づいていくと足元がふらつき、壁にもたれかかか

らないと立つことができなかった。
春美「…ここだ」
春美はその部屋の扉を押し開けた。
扉の奥の部屋はかなり広く、テラスに繋がる大きなガラスの窓が何個もあり、外の闇が見える。
窓には真っ黒なカーテンが一部、掛かっている所もあった。
壁には趣味の悪そうな大きな絵が何枚もかかっていた。
テーブルと暖炉もある。
暖炉の上には、枯れた薔薇の植木が置いてあった。
ただでさえ気持ちが悪いのに、
この部屋には心休まる物が何一つなかった。

ギイイ…

春美「!?」
部屋の中には他の部屋に繋がる扉があり、その扉が風で不気味な音をたてながら開いたり閉まったりを繰り返していた。
春美はその部屋に入った。

春美「!?」
その部屋の中には人影があった。
春美はその部屋の光景を見て、息を呑んだ。
春美「っ…春恵ちゃん！」
部屋の中心に、縄でグルグルに縛られて気絶している春恵がいた。
春美は直ぐに駆け寄った。
春美「春恵ちゃん、春恵ちゃん！」
春恵「う…」
名前には反応したが、目を覚まさなかった。
春美「一体何が…」
春美が春恵に気を取られていた時だった。

ガチャン。
さっき入ってきた扉が閉められた。
春美が振り向くと、そこには
デルダとソフィーナが立っていた。だが、いつもと感じが違った。
ソフィーナよりデルダの方が、どう見ても態度がでかいのだ。
春美「何、どういう事？
ソフィーナさん…どうして…」
するとソフィーナは眉間にシワをよせた。
ソフィ「…裏切りに、あったのだ」
ソフィーナの声には憎しみが込められていた。
春美「な…！」
ソフィ「こいつも…ビスデも……
魔王に寝返った敵だ！！」
ソフィーナは目を閉じた。
「その通り」
部屋の反対側から声が聞こえ、
春美はその方を見た。
春美「!?」
そこには黒い衣服を身に纏う大男と、傍らにはビスデがいた。
さっきから感じていた、
強力な妖力は大男からでていた。
春美「っ…何で？ビスデさんもデルダさんも…ソフィーナさんの味
方だったじゃないっ！」
すると大男は大きく口を開けて、笑いだした。
「ガハハハッ！」
ビスデ「ふん、私はソフィーナの味方ではない。
ソフィーナを見張るために送り込まれた使者、スパイと言うべきか」
ビスデは笑みを浮かべた。

後ろでは、デルダも笑みを浮かべていた。
春美「そんな…」
春美は落胆した。
張っていた気が途切れ、
立てなくなり、床に膝をついた。
「残念だったな」
春美は持っていたナイフを床に落とした。
春恵「う…ん」春恵が苦しみだした。
春美「?…春恵に何をしたの！？」
春美は大男に叫んだ。
春美「今は…？」
「なぁに、眠って貰っているだけだぞ！…今はな…」
春美はその言葉に引っ掛かった。
ビスデ「お前たちは、これから死ぬんですよ…。
魔王様の手によって」
ビスデは笑った。
ビスデ「喜びなさい！
魔王様が直々に死を与えてくださるのですよ?
これは一生に残る栄誉です！」
ソフィ「腐ったか、ビスデ！
我の敵は魔王。栄誉などいらん」
ソフィーナは笑った。
ビスデ「…そんな態度取れるのも今のうちですよ」
ビスデがそう言うと、デルダは春美に向かってソフィーナを押した。
ソフィ「くっ…」
春美「ソフィーナさん！」

春美はソフィーナを受け止めた。
「今からこいつらの処刑を行う」
大男が大きなオノを取り出した。

大男は大きなオノを振り上げた。
春美「っ！」
春美は急いで結界を張った。

ガーン…

オノは降り下ろされ、結界に食い込んだ。
春美「くっ…」
春美は震動で頭がくらくらした。だが、結界が崩壊しないように、気を張り続けた。
「無駄だ！」
大男の力はどんどん強くなっていった。
春美「く…」
ソフィ「春美…」
ソフィーナも横から力を出して、春美の結界に力を注いだ。
「そんな力で……ふんっ！！」
大男の力がさらに強くなった。

ピキ…

結界にヒビが入った。
春美「っ…」

パキ…ピキ…

ヒビは広がっていった。
春美（やばい！）

春美は力を注いでいたソフィーナを押し倒した。
ソフィ「なっ！」
ソフィーナの力がなくなり、ヒビは全体に広がった。

パ、パキ…パキーン！！

そして、結界は崩壊した。
結界が崩壊すると、大男のオノが春美の腕をかすめて、床に突き刺さった。
春美「くっ…」

ポタッ…ポタッ…

肩からは血が流れた。
春美「っ…」
春美は肩を押さえた。
ソフィ「春美！！」
ソフィーナは春美に駆け寄った。

ドクン…

春美「！！」
春美は肩の痺れ以外にも、何かが体を蝕んでいることに気がついた。
春美「な、何！？」
手が動かない！？」
ソフィ「え！」
ソフィーナはオノを掠めた春美の肩を見た。
青く変色してきていた。
ソフィ「…毒！？」
春美「！？」

ソフィ「しかも速効性が強い…」
すると大男はオノを持ち上げた。
「そうだ、よく解ったな。
このオノの先には、この世界で最も強力な毒を塗り込んである。
これに触れたら最後、５分ももつまい。
ふふ、ガハハハッ！」
大男は優越感に浸った。
ソフィ「…じ、じゃあ春美は…」
ソフィーナは恐る恐る聞いた。
「死ぬ！間もなくな。
ガハハハハハー！！」
大男はオノを肩に乗せ、仁王立ちし、腰に手をおき、込み上げる快感を抑えることはしなかった。
春美「………死ぬ？」
春美「死ぬ？…こんな所で？
春美の頭の中が真っ白になった。
ハハ…い、嫌よ。まだ死ぬわけにはいかない…死ねない！」
しかし、死は目前まで迫っていた。
春美「っ…、ゲホッ、ゲホッ。
ゴホッ…ゴ、ゴホッ！」
咳に混じって、血が吐き出された。
春美「嫌…嫌だ、嫌！」
死の恐怖を感じ、涙が流れた。
「これは決定事項だ！
変えることはできまい！！」

春美「嫌アアァァァァァ！！！！」

春美の恐怖が頂点に達した。
その時、

チリィン…

春恵の首に掛けていたはずの鈴が、春美の目の前に現れた。
春美「え…鈴！？」
春美は鈴を掴んだ。

フワッ！

鈴を掴むと、鈴から暖かいお日様の光と風が出て、春美を包んだ。
春美「…暖かい…」
春美は気持ちが落ち着き、目を閉じた。
ソフィ「！？」
ソフィーナは春美の側で、鈴の効力を見ていた。
鈴の光は春美の肩の傷を直していたのだ。
青く変色していた皮膚の色も、
元に戻った。
「何！？」
大男は驚き、目を見開いた。
春美「感じる…この力、宇宙葉嗣」
春美は目を開けた。
そして鈴を首に掛け、ナイフを再び持った。

鈴の結界

春美はナイフを構えた。
「面白い！」
大男もオノを構えた。
春美「はあっ！！」
春美は大男に飛びかかった。
「単純な攻撃は叩き潰す！」
大男はオノを横に振り払った。

ビュン！

オノが風を切る音が聞こえた。
「な…ど、どこに行った！？」
大男はオノを振り払った時に、
避けた春美を見失った。
デルダ「魔王様、後ろです！」
「なぬ！？」
デルダの注意で振り替えると、
そこにはナイフを振り上げた春美がいた。

ザン！

ナイフを振り降ろした。
「ぐあっ！！」
ナイフは大男の背中を真っ直ぐ切った。
大男はオノを床に落とした。
デルダ「貴様！」
デルダが春美に向かってきた。

春美「!」
春美はデルダをかわしてビスデに向かった。
ビスデ「な!!」
ビスデは槍を取りだし、春美を切りかかった。
春美はビスデの攻撃を避け、
高く飛び上がり、右足のかかとを向けてビスデの肩に落とした。
ビスデ「くっ!」
ビスデは肩の骨を折られ、槍が持てなくなった。

その隙に、春美は春恵を担ぎ上げソフィーナの手を引っ張って
その部屋を脱け出した。

しかし、春美の体力は長くは続かなかった。
直ぐに息が上がり、走るスピードが落ちた。
ソフィ「春美、こっちだ!」
ソフィーナは春美を逆に引っ張り、鍵の掛かっていない部屋に入った。
その部屋はさっきの部屋より広くはなかったが、休むには十分だった。
春美は部屋のソファーに、春恵を寝かした。
春美「私の霊力は奴等に気づかれてしまう。結界を張らないと!」
春美は鈴を取りだし、部屋を丸々結界で包み込んだ。
春美「はぁ…」
春美は座りこんだ。
ソフィ「…すまない」
春美「ソフィーナさんが
謝る事ではないよ」
春美は、2人を巻き込んだことに後悔をしているソフィーナの頭を撫でた。
春美「ソフィーナさんは悪くない」

春美はソフィーナの手を握った。
ソフィ「……」
しかし、ソフィーナは顔を上げようとはしなかった。
しばらく沈黙が続き、春美は疲れて眠ってしまった。
その時結界は、ソフィーナが維持していた。

春恵「ん…？」
春美が眠りにつき、
しばらくすると春恵が目覚めた。
春恵「あ…あれ？」
春恵は起き上がり、部屋の様子を伺った。
床には春美が丸まって眠っていた。
ソフィ「起きたか、春恵」
ソフィーナは向かいのソファーに座って、結界の基である鈴に力を注ぎ、結界を維持していた。
春恵「何してるの、ソフィーナ？」
春恵はソファーから降りて、春美をソファーに寝かした。
ソフィ「予定通り事は進んでいる。今は春美を休ませているだけ」
春恵「結界を張ってるのね」
ソフィーナと春恵は意味深な言葉を交わした。
春美は眠っていたが、微かに2人の会話が聞こえていた。
春美（2人とも、
何をはなしているの？
これは…何の夢？）
春美は夢だと思っているようだ。

春恵「…ソフィーナ、結界を張る作業を代わるよ」
春恵は鈴を取ろうとした。
ソフィ「いや、まだ休んでいていい。私は戦いでは何の役にもたた

ないから…」
ソフィーナは苦笑いした。
春恵「…じゃあ、もうちょっと休んでるね」
春恵はそう言って、春美の頭元に座った。
春恵「春美ちゃん…」
春恵は春美の頬を触った。
春恵「無理させちゃって、ごめん」
春美　ん…いいよ
春美は夢でそう答えた。

反撃

春美「…っ？」
春美は目覚めた。
ソファーに寝ていたので驚いたが、側に春恵がいたので安心した。
春美「春恵ちゃん、大丈夫なの？」
春恵「うん。春美ちゃんこそ…」
春美「私は大丈夫だよ」
春美は向かいのソファーに座っているソフィーナを見た。
春美「あ…ソフィーナさん、
そういえば、牢屋の人たちはどうなったんですか？」
ソフィ「それが、助け出してる途中に兵が押し寄せてきて…
ちゃんとは分からないけど、
多分牢屋にリターン」
春美「そう…ですか…」
春美は牢屋にいる人々を想像した。そして、結界の様子を聞いた。
春美「様子はどうですか」
ソフィ「特に変わったことは…！」
話している途中にソフィーナの顔色が変わった。
春美「！？」
直ぐに春美も顔色を変えた。
春恵「…何？どうしたの2人とも」
春恵は判っていなかった。
春美「…この部屋にいることが
バレたようね」
ソフィ「ああ。
ドアの外にデルダが…」

ドーン！

部屋が揺れた。
春恵「何！？」
３人は床にしゃがんだ。
春美「結界を壊すつもりよ………なんて大きな力
こんなの何発も、もたない」
ソフィーナは春美に鈴を渡した。
ソフィ「戦おう！」
春美「そうね！」
春美は鈴を受け取って首に掛けた。

ドカーン！！

次の衝撃で、結界は壊された。
その瞬間に、デルダが銃を持って叫びながら、部屋の中に乗り込んできた。
デルダ「うるぁあああ！」
春美「私が相手よ！」
春美はナイフを手に、デルダに正面から挑んだ。
春美はナイフを振り上げ、デルダが春美の間合いに入ってくるのを待った。

デルダは何も気づかず、ただ突撃してきた。

春美「！」
デルダの左足が間合いに入った時
春美は動いた。

ドバーン！……ザン！

デルダの銃弾をナイフで真っ二つに斬り、その勢いで春美はデルダに飛び掛かった。

ザン！

デルダ「ぐあっ！！」
ナイフはデルダの左胸に突き刺さった。
デルダ「っ……」
デルダは震えながら、一歩二歩と後ろに下がっていった。
そして、ドアの辺りで仰向けに倒れた。

春美「…よし、1人やった。
ソフィーナさんと春恵は牢屋にいる天使族の方々を助けて！
私は魔王を相手するから！！」
ソフィ「1人で大丈夫なのか？」
春恵「…」
春美は微笑んだ。
春美「…私は時間稼ぎするだけ。
2人は天使族の方々を助けたら、私を助けに来て？」
春恵「…1人では無理そうなの？」
春美「難しいね。
でも、ソフィーナさん1人で牢屋に行かすわけにはいかない。
春恵ちゃんには、忙しいけど…
牢屋から魔王のところまで来て！
私は待ってるから…」
春美は春恵に頼った。
春恵はそれを嬉しく思った。
春恵「判った、すぐ行く！」
「グオォォォ！」

デルダが壊した扉から次々と魔物のような生物が出てきた。

春美「行って！

春恵ちゃん、ソフィーナさん」

春美はナイフを構えて、その生物に向かって走り出した。

春恵とソフィーナは、春美が囮になっている間に部屋の窓から脱け出した。

春恵とソフィーナは見つからないように、そっと牢屋に向かっていた。
春美が囮になっている間に、牢屋の天使族を助けるのが目的だ。
２人は牢屋に繋がる螺旋階段を降りていった。

春恵「春美ちゃんの霊力すごい。
離れてるのに、私でも感じる…
私の助けなんて
ホントはいらないんじゃ…」
春恵は口を尖らせた。
ソフィ「何を言っている？
春美は春恵を必要だと言っただろう？」
ソフィーナは春恵を見た。
ソフィ「それに、魔王は強い。
春美１人では
心もとないのであろう」
春恵「…だといいな」
ソフィ「……」
その会話を境に、２人とも話さなくなり沈黙が続いた。

２人は螺旋階段を降りおいた。
そして、牢屋に残る天使族の方々を助け出そうとした。
「やはり、来ましたか…」
「「!?」」
２人は声に反応し、振り向いた。
そこにいたのは、ビスデだった。
ソフィ「ビスデ…」

春恵「…」
2人はビスデを見た。

ポタ…ポタ…ポタポタ

春美は血が滴るナイフを持って、荒々しく呼吸していた。
春美の周りにはそのナイフで斬られ、哀れな骸となった魔物が円を描くように倒れていた。
春美「ち、ちょっと…無理し過ぎ…た…ハァ…ハァ…かな?…っ」
春美はナイフを見た。

ピ…パキ…パッ…パキーン!

ナイフにヒビがはいり、ナイフは折れた。
春美「…あーあ、折れちゃった。
仕方ない…ただのナイフだしね」
春美は折れたナイフを床に投げ捨てた。

春美「!?」
さっき感じた魔王の妖力が増大したモノを感じた。
春美(あ、危ないっ!!)
春美は”何か”を感じ、鈴で結界を張った。
その直後だった。

ドパーン!!!!!

壁が一瞬にして消え去った。
春美「…っ!」
春美は結界を解き、周囲を見回した。

地上より高くそびえ立っていた、叫び山の城の二階部分から上の階全てが消えていた。
春美「…何て事を」
春美は妖力の感じる方を見た。
そこには妖力を放出している魔王の姿があった。
魔王の妖力は、城を半壊状態にしたのだ。
春美「よくも…」
春美は魔王に向かって飛び込んだ。

春恵「さっきの大きな音…
それに力…一体…」
春恵とソフィーナは、城が半壊した音と魔王の強力な妖力を感じ、螺旋階段を駆け上がっていた。
ソフィ「ハァ…ハァ…ハァ!!」
2人は息を切らしながら、地上に続く階段を登り続けた。

そして、やっと地上に出た。
春恵「何…これ」
最初に2人が見たのは、一階なのに天井がなく、真っ暗な空が見えた事だった。
ソフィ「何が起こったのだ?」
2人は辺りを見た。
春美「く…」
春恵「春美ちゃん!?」
春恵は上空から春美の微かな声を聞き、上を見た。
ソフィーナも気づき、上を見た。
上空には春美の首を片手で持ち、浮いている魔王と春美がいた。
「他愛ないなぁ、もっと面白味はないのか?」
魔王は春美をさらに振り回した。

「…お前はもういらぬ」
魔王は春美を放り投げた。
春美は城の3階辺りから、地面に落とされた。
春恵「春美ちゃん！？」
春美は気を失っていた。
春恵は春美を助けようと、落下地点に向かって走り出した。
春恵「だめ…間に合わないっ！！」
ソフィ「春美！」
ソフィーナは出てきた螺旋階段に向かって叫んだ。
ソフィ「あの娘を助けよ！」
すると、地下からすごい数の天使族の方々が飛んで出てきた。
そして、天使族の方々は地上に着く寸前の春美を受け止めた。
春恵「みんな…」
春恵は喜んだ。

魔王（2）

「何だ？牢屋の天使族か…
それに、春恵とか言う娘に…」
魔王は春恵たちを見下した。
「おお、ソフィーナもいるなぁ」
ソフィ「黙れ！」
ソフィーナは、手に魔法棒を持って魔王に向かって行った。
春恵「ソフィーナ！」
春恵もソフィーナに加勢するように魔王に向かった。
春美を受け止めた天使族の方々も、春美を安全な所に寝かせ、加勢に向かった。

ドカーン！！

ソフィーナと春恵と天使族の力が魔王の妖力とぶつかり、大爆発を起こした。
「流石は天使族と言うべきか？
人間の小娘とは比べ物にならん」
魔王は偉そうに評価した。
春恵「うるさい！
春美ちゃんは1人で立ち向かったんだ…一緒にするな！！」
春恵は霊力で包んだ瓦礫の石を、魔王に投げつけた。
これが今の春恵の最大の攻撃だ。
「大した戦いも出来ない者が、口をはさむでない！」
魔王が飛んできた石をよけ、妖力を一点に放出し、春恵の足元を狙った。
春恵「！？」

春恵は攻撃が当たる前にその場から逃げた。

ドカーン！

妖力は床に当たり、足場が崩れた。しかし、崩壊はその一点だけでなく、春恵が逃げた先にも広がった。
春恵「キャア！」
足元が崩れ、春恵は落ちた。

春恵「っ…？」
春恵は落ちた痛みを感じなかったので目を開けると、ビスデに抱えられていた。
春恵「ビ、ビスデさん…」
ビスデは春恵を春美の元に連れていき、降ろした。
ビスデ「後は我々に
任してください」
春恵「…あ、はい」
ビスデはソフィーナの元に行った。
「どういう事だ！？ビスデ！！
お前は私の側であったろう？」
ビスデ「私が忠誠を誓うのは、
ソフィーナ様以外に存在するはずがない！！」
ビスデはソフィーナの元に着くと、ひざまずき、挨拶をした。
「…まさかお前はダブルスパイ！」
ソフィ「そういう事だ！」
今度はソフィーナが答えた。
ソフィ「無論、お前がデルダに届けさせたあの伝言…。
”魔王が城を離れている”
あれは始めから、我らをおびき寄せるための嘘だと判っていた」
「何！？」

ソフィーナは魔王を見た。
ソフィ「…では、何故そこまで知っていて、わざわざ城に忍び込んだのか・・・」
ソフィーナの言葉に、魔王は聞き入っていた。
ソフィ「その理由は…」
その時には既にビスデが魔王の後ろに回り込んでいて、振り返った魔王の腹から聖剣を突き刺した。

グサ…

「な…何？そ、それは聖剣だと！？何故だ！！…それは…私が厳重に…保管していた物っ…」
魔王は口から血を吐いた。
ソフィ「そのために、ビスデがおる。我らが魔王の気を惹いている間に、とってきて貰ったのだ」
ソフィーナはビスデから聖剣を受け取り、地に降りてきた魔王の傍に近づいて留目を刺した。

グサ…

ソフィーナが魔王の首を獲った。

あまりにも一瞬で事が進み過ぎて、春恵は驚いた。
春恵「…た。やった、やったぁ！」
魔王の死は呆気ないものだった。
ソフィーナは魔王の血で汚れた聖剣を清め、ビスデに渡した。
ソフィ「…しかし、デルダに怪しまれないためとは言え、春美には悪い事をしたな…」
眠っている春美をソフィーナは、優しい目で見た。
春恵「目を覚ましたら私から説明しとくから、心配しないで」

ソフィ「ああ、頼む」
ソフィーナはビスデを見た。
ソフィ「ビスデ、
悪いがあと一仕事してもらう。
春恵と春美を元の世界に連れて行ってくれないか？」
ビスデ「かしこまりました」
ビスデは一礼した。

こうして、やっと2人は元の世界に戻れるようになった。
次元の狭間までビスデは気絶している春美を運んでくれた。
春恵「ありがとう、ビスデさん…」
ビスデ「いえ、こちらこそ。
お陰で魔王をやっつける事ができました。目が覚めた春美さんに、
よろしくお伝えください」
春恵「…はい、判りました」
春恵は春美を受け取り、元の世界に通じる次元の穴を通って行った。
ビスデは、春恵たちの姿が見えなくなるまで見送った。

荒らされた家

「春美…春美…」

暗闇の中で、春美を起こす人がいた。
春美「…その声は、桜子？」
春美は重い瞼を開け、周りを見た。
真っ暗な中に、桜子がいた。
春美「桜子…」
桜子「お疲れ様、春美。
魔王は死んだよ」
春美「え！？」
無邪気に笑う桜子の言葉に、春美は驚きを隠せなかった。
桜子「でも、新しい妖怪が出たみたい。封印はあと2つ…頑張って、春美」
そう言うと桜子は消えていった。

ドクン…

いつつ、
最強の天狗あらわる

頭の中に、その言葉が響いた。

春美「ん…？」
目が覚めると、そこは宇宙家のリビングのソファーの上だった。
体を起こし、周りを見た。
確かに今いるここは、宇宙家のリビングだった。
だが、リビングの至るところに荒らされた形跡があるのだ。

春美「ここ…家？私、帰ってくることができたの…」
魔王との戦いの途中に気を失っていた春美は、この突然の状況の変化が信じられなかった。
春恵「あ、起きたね。春美ちゃん」
そこに春恵が着替えを持って、リビングにやって来た。
春美「…春恵ちゃん、これは一体どういう事？」
春恵「…私たち、あの世界から帰ってくることができたんだ」
春美「!？
どうやって…春恵ちゃんが魔王に勝ったの？」
驚く春美に、春恵は今までの事を説明した。

春美「じ、じゃあ…ビスデさんはいい人だったのね」
春美は直ぐに理解した。
春恵「うん。
…ずっと知ってたのに、隠しててごめんね」
春恵は謝った。
春美「…ううん、私こそ。
1人で皆を守ることができると思ってた…でも、現実は守るなんてできない…私が守られてた。
変に意地張ってた…。
ごめんなさい」
いつの間にか、話は春恵が連れ去られる前のケンカの反省に変わっていた。
春恵「私は、判ってくれたらいい。
だからもういいよ。春美ちゃん」
春恵は春美に笑いかけた。
その笑顔が、春美の気を楽にさせた。
その話が済むと、今度は今の話になった。

春美「それで、どうして家が荒らされてるの？」
春美は周りを見た。
どう見ても荒らされている。
テーブルは脚が折れて傾き、
電気はチカチカと、ついたり消えたりを繰り返していた。
窓ガラスは全て割られ、カーテンもビリビリに破かれていた。
壁には大きな爪跡や、何かが当たり、崩れて中の鉄筋が見えていた。
春恵も周りを見た。
春恵「戻ってみたらこんな事に…」
春恵は春美を見た。
春美「みんなは……、乙葉さんや光輝くんや吉長くんは？」
春恵「…誰もいない。
残ってたのは荒らされた形跡だけ。
でも半日位前に、池の河童が来て…今の状況を教えてくれた」
春美「河童…河介ね」
春恵は頷くと、河童から聞かされた話を春美に話した。

戻ってきた時

春恵は春美を支え、ビスデと別れて次元を越えて元の世界に帰ってきた。
次元を越えて出た場所は、宇宙家の池の前だった。
春恵は空を見上げた。
空は真っ暗で星ひとつと見ることができなかった。
春恵「…とにかく、春美ちゃんを休ませなくちゃ！」
春美を支えたまま、春恵は家に入った。
春恵「乙葉さん、今帰りました。
春恵です。春美ちゃんを運ぶの手伝ってください！」
春恵は渡り廊下から家の中に叫んだが、乙葉からの返事がない。
それどころか、吉長や光輝の返事も気配もなかった。
春恵「…」
仕方ないので、春恵は1人で春美を運んだ。
春美の靴を脱がせた時、初めて家の中を見た。
春恵「…こ、これって」
廊下を見ただけだが、飾ってあった絵や、花瓶が床に落ちていたり、壁に傷がいくつもあった。
春恵「ちょ…何が起こってるの？」
春恵は春美を床に座らせて、家の中を探索した。

家の中は荒らされていて、人は誰もいなかった。
2人の部屋のベッドはグシャグシャに引きちぎられていたので、春美をリビングのソファーに寝かせる事に決めた。

春美を寝かせ、何か食べるものがないか探しにキッチンに行った。
もう何もかも荒らされていて、食べれるものなどなかった。

春恵「…そうだ、床下！」
春恵は非常食が床下の倉庫に納していると聞いた事があった。
キッチンマットをめくり、床板を取った。
そこにはペットボトルの水が５本とクッキーやカップラーメン等のインスタント食品があった。
春恵「見っけ…あ、救急箱もある」
もしものために、救急箱を床下から取り出した。

春美「う…っ…うぁ…　」
春美が急に苦しみだした。
春恵「春美ちゃん！？」
急いで春美に駆け寄ると、春美の頬が赤みがかっていたのが別った。
春恵「熱がある…？」
持っていた救急箱を開けて、体温計や熱冷ましの薬を取り出した。
春恵「………３９度！？
な、何でそんな高熱が…」
「まぁ、そりゃあ…
魔王と戦ったからな」
春恵「！？」
春美に夢中で、背後の気配に気づかなかった。
春恵「誰！」
春恵は振り返った。
「忘れたのか？
オイラだよ、オイラ！
河童の河介さ！！」
そこには全身深緑色の物体、河童の河介がいた。
春恵「お前っ！！」
春恵は構えた。
河介「ち、ちょいと待て！
今回は人を連れ去るつもりで来たんじゃない！！」

春恵「何を！」
春美は河介と仲良くなる事に成功してるが、春恵からしたら河介は自身をさらった相手。
気を緩める事はできない。
河介はすかさず、手に持っていた葉っぱでこさえた小包を差し出した。
春恵「…何ソレ？」
河介「薬だ。すぐに春美に…」
春恵「信用できない。
春恵は即答した。
毒かもしれない物を春美ちゃんに飲ませれない！」
河介「あのなぁ…春美は死にかけてるんだぞ？
そのまま人間の治療だけじゃ、魔王の毒は抜けない」
河介は頭をポリポリとかきながら説明した。
春恵「魔王の毒？ほっといたら死？そんなことない、魔王に受けた傷は鈴が癒した！」
河介「体内に残留した毒もか？」
春恵「…残留？」
春恵は春美を見た。
河介「いいから春美を救いたければ、その薬を飲ませろ！」
春恵「でも…」
春恵は迷った。
河介「オイラは春美を殺さない！」
春恵は河介を見た。
河介の目は真っ直ぐ春恵を見ていた。
春恵「…判ったよ」
春恵は迷った末、飲ませることにした。

戻ってきた時（2）

薬を飲ませると春美は落ち着いた。
春恵「ふぅ…」
春恵は座り込んだ。
河介「……」
河介は無言で家を見渡した。
そして、座り込んだ春恵に話しかけた。
河介「お前、知りたくないか？」
春恵「何を？」
河介「何で家が荒らされているのか…」
春恵「知ってるの？」
春恵は話に食いついた。
春恵「教えて、何があったの？」
河介「いいぞ。あれはなぁ…」
河介は話始めた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

春美が魔王のいる世界に行ってすぐの事だ。
突如この村に封じられていた大天狗が甦り、村を破壊し始めたんだ。
宇宙家の奴等はそれを阻止するために、大天狗に挑んだ…

乙葉「春美ちゃんがいないなんて…村を守れるの？」
吉長「それどころか…
死んでしまうぞ！敵いはしない」
二人は最初から諦めていた。
だが…
光輝「おい、2人とも！

春美たちが帰ってきた時に俺らは”何もしなかった”と言えるのか？村がなくなっていたら、2人とも悲しむ…」
光輝だけは諦めてはいなかった。
乙葉「2人……ああ、春美ちゃんと春恵ちゃんね」
吉長「だが、俺たちでは勝てない」
依然、2人の気持ちは変わっていない。光輝はそんな2人に渇を入れた。
光輝「何言ってるんだ！
勝たなくていい…守るだけでいい」
先に心が変わったのは乙葉だった。
乙葉「そうね、2人の帰る場所を守らないと！」
吉長「乙葉さん…」
乙葉「戦おう、吉長くんも！」
吉長「……仕方ない、戦うよ」
乙葉は光輝を見た。
吉長はあまりノル気じゃなかったが、乙葉に流され戦う事になった。
光輝「戦おう、俺たちだけで！」
乙葉「えぇ！」
こうして、宇宙家の奴等は家を出て行った。

勇敢に戦いを挑んだが、大天狗は宇宙葉嗣が最も苦戦した相手の一人だ。
敵うはずもなく、宇宙家の奴等は負けた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

春恵「負けた…って、
みんなはどうなったの？」
春恵は最悪の事態を想像した。
春恵「ま、まさか…死んだ…とか」

河介「…」
春恵の頭の中が真っ白になった。
春恵「そ、そんなの嘘でしょ？
嘘と言って！！嘘と……」
河介は泣き崩れている春恵を見て、笑いを堪えていた。
河介「ぷ…く、くくく…」
春恵はそれに気づき、河介をにらんだ。
春恵「よく笑えるわね！
最低、やっぱ人間じゃないよ！」
春恵は手元にあったハサミを持って、河介に襲いかかった。
河介「うわっ、ごめ…ごめんて！
誤解、誤解だよ！！」
河介は両手を上げた。
春恵「え…？」
春恵は止まった。
春恵「誤解って？…何が？？」
河介「負けたけど、死んでない！」
春恵「えぇっ！？」
河介「大天狗が、おびき寄せるために人質にするって…」
河介は春恵が持っていたハサミを取り上げた。
春恵「おびき寄せるって…誰を？」
河介「そこまでは知らねえ。
でも、生きてるって事だろ？」
そこまで聞くと、春恵は床に座り込んだ。
春恵「よ、よかった…生きてる。
みんな生きてるんだ…」
安心するとまた河介をにらんだ。春恵「…確かに私の誤解だけど、
何で何も言っわなかったの？」
河介は笑った。
春恵「最低…さいってぃ！！」

春恵は河介が取ったハサミを取り返した。
河介「うわっ！」
春恵「こんのぉ！！」
春恵は河介に襲いかかった。
河介は軽々と避け、リビングの戸の前で停まった。
河介「じ、じゃあオイラはこの辺で池に帰るよ！
春美によろしく伝えといてくれよ」
そう言って、河介は池に帰っていった。
春恵「まったく…」
春恵はハサミを河介のいた所にほり投げた。

春恵は河介から聞かされた話を春美にすべて話した。
春美「…みんなは生きてるのね、ひとまず安心ね」
春恵「うん」
だが春美には疑問が浮かんでいた。
春美「…じゃあ、大天狗は何のために家を荒らしたの？
そもそも大天狗の目的って…？」
春恵「…確かにおびき寄せるためなら家を荒らす必要ない…」
2人は顔を見合った。
春美「…私たちの部屋に行きましょ」
春恵「ん？」
2人は部屋に行った。

春美は部屋に行く途中、他の部屋の様子を見ていった。

部屋に着いた。
春恵「…どうしたの、春美ちゃん」
春美「春恵ちゃんは、この部屋を見て気づく事は何かない？」
春恵は部屋を見た。
部屋はすでに扉から壊されていて、いくつもの足跡が残っていた。
春恵「…足跡。足跡が沢山残ってるってことは、敵は1人じゃない」
春恵は春美を見た。
春美「…確かにそう。
だけど、それは他の部屋にも見られていたのよ。
他にはない？」
春恵「他に…？」
春恵はもう一度部屋をじっくり見た。

机から目をつけてみた。
引き出しがひとつひとつ丁寧に抜き取られ、中身が下に散乱していぃる。他にもタンスの中身も散乱していた。
春恵は何度も引越しをしていて良かったと思った。
今の部屋にある荷物は、まだ少ない。2人は一時的にここに越してきただけなので、前の家に置いてきた荷物もあるからだ。
次に春恵はベッドを見た。
掛け布団から敷き布団のカバーまで剥がされ、引き裂かれ中の綿やら何やらが出ていた。
この部屋は他と同じく荒らされている。

春恵は春美を見た。
春恵「ごめん、私は特に何も…。
春美ちゃんは何に気づいたの？」
すると春美はベッドを指差した。
春美「じゃあ、あのベッドを見て何か気づく事は？」
春恵はベッドを見た。
春恵「…やけに荒らされてるなぁと思う位で…」
春恵がつぶやくと春美は笑った。
春美「そうよ！
この部屋は他と比べてやけに荒らされてるの」
春恵「…そ、そうだね」
春恵は部屋を見て頷いた。
春美「という事は、大天狗はこの部屋から何かを探した。だけど、見つからなかったからおびき寄せる〜となったんじゃないか？」
春恵「…言われて見ればそうかもしれないけど、大天狗がねらったモノって何なの？」
春恵は春美を見た。
春美「…これは私の仮説だけど」

春美は首からさげていた鈴を見せた。
春恵「鈴!?ただの鈴を?」
春美「ただの鈴じゃない。
宇宙葉嗣の物よ…」
だが、春恵は宇宙葉嗣を知らなかった。
春恵「誰?宇宙葉嗣って…」
春美は昔の記憶の事を話した。

春恵「昔にそんな事が…」
春美「もし…もしあの時〝中の首〟に封じ込められていた、あの大きな目をもった妖怪が大天狗なら、鈴を知っているはず。そして、何より鈴が脅威のはず」
春恵「…だね」
春恵は納得した。

ドクン…

春美「!?」
春美は妖気を近くに感じた。
春美「中庭…行くよ!」
春恵「?」
春美は春恵に説明しながら中庭に行った。

中庭には、身長が同じ位で羽が生え、鼻が長く顔が赤い妖怪、天狗がいた。
春恵「天狗!?」
春美はゆっくりと中庭に靴を履いて出た。
春美「何の用?」
すると天狗は一礼すると、大天狗からもらった伝言を伝えた。
「山の頂上で待つ!

来なければ人質は殺す…と大天狗様からの伝言です」
どうやらこの天狗には、今戦う気はないらしい。
春美「…その人質とやらは生きているのでしょうね？」
春美は変に構えるのを止めた。
「はい、牢にて大事に捕獲されております」
春美「そう」
全てを伝え終えると、天狗はまた一礼をした。
「では、これにて」
そうして、天狗は飛んで行った。
春美は春恵を見た。
春美「伝言がなくても助けに行くよね」
春恵「当たり前じゃん！」
２人は山にそびえ立つ城を見た。

突入！

2人は天狗が帰った後、腹ごしらえをして新しい服に着替え、準備をし、家を出た。

そして、村の北の山にそびえ立つ城を目指して登った。
山中、2人は時々休憩を挟んでいたので、城につく頃には日が傾いていた。
春美「行くわよ、春恵ちゃん！」
春恵「うん！！」
2人は力を合わせて分厚い門を破壊し、敷地内に侵入した。
一歩中に入ると、続々とどこからともなく天狗が集まってきた。
「敵襲！！」
「配置に着けー！」
「てあえー！」
あっという間に大騒ぎに変わった。
春美「邪魔、どきなさい！」
霊力を纏う手に触れた天狗は一気に灰に変わり果てた。

春恵はそれを見て、真似て同じように霊力を纏う手で天狗に触れた。
だが天狗は灰にはならず、ぶっ飛んだだけだった。
春恵「あり…？」
春美「これはね、心を上手くコントロールすればいいの」
春美がアドバイスを戦いながら教えた。
春恵「心…？」
春美「そうよ。
霊力は心と繋がっていると考えてみて。怒りを感じれば、霊力は力強く…悲しみを感じれば、霊力は淑やかに…」
春恵は春美の霊力を見た。

春恵「今春美ちゃんが感じているのはどんな心なの？」
春美「冷酷…かな？
相手に手加減するつもりないかんじ……だから、霊力は冷たく」
春恵「なるほど…」
春恵はアドバイスを受け、心をコントロールしてみた。
「うりゃー！！」
天狗が春恵の上から攻撃してきた。
春恵はそれを避け、攻撃してきた天狗の間合いに入り込んだ。
そして、霊力を纏う手で天狗に触れた。

ボッ…

すると、触れた部分から火が出てその天狗の全身に広がった。
「うわぁぁ！」
天狗はみるみるうちに、焼け焦げ倒れた。倒れた後も、火は燃え続けた。
春恵「んー、春美ちゃんみたいにはできない」
春美「まあまあね。
もっとコントロールできたら、相手を苦しめることなく一瞬で、…ね？」
あえて言わない春美の笑顔は、冷たくて心地よいものではなかった。
春恵「うん…」
春恵は感じていた。
この戦いが始まってから、春美は変わっていた事を…。
そして、強くなっている事を…。

ドカーン！！

2人の力により、出てきた天狗はあらかた蹴散らした。

春美「さ、中に入るとしましょ」
春恵「ん」
2人は城の屋敷内に入った。
春美「春恵は乙葉さんたちの霊力は感じる？」
春恵は心を澄ました。
春恵「……微かになら」
春美「なら、それをたどってみんなを助けに行って！」
春恵「春美ちゃんは？」
春美「大天狗のところ」
春恵「…わかった、後から行くから残しといてよ！」
春恵はあっさり承諾して、乙葉たちを助けに行った。

この城は見た目叫び山の城より大きいが、中は複雑ではなかった。
一際大きな霊力をたどっていけば、大きな扉の前にたどり着いた。
春美「…ゴクン」
唾を飲み、緊張しながら扉を押し開けた。

ガッタン…

その奥は廊下と違い電気はなく、灯りはロウソクだけだった。
だが、数が尋常ではない。
左右の壁はすべてロウソクで埋め尽くされていたのだ。
その灯りは遠くまで見える。
奥行きは相当ある。

「ん、あの時の
葉嗣の一族の者か？」

頭の上から大きな声が聞こえ、春美は見上げた。
天井は奥行きと同じくらい高かった。天井まではロウソクの火が届

かないのか、真っ暗だった。

ギロ…

その中で、光る大きな黄色い瞳が春美をずっと見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1414x/

鈴の音

2011年12月29日09時46分発行